



## はじめに

「人民の人民による人民のための政治」とは、第16代アメリカ大統領のリンカーンによる、演説のなかの言葉として有名である。

しかし、この言葉がリンカーン自身によるものではないといわれたら、多くの読者は「まさか？ そんなはずはない！」と思うだろう。

じつはこの言葉はイギリスの宗教改革派ジョン・ウィクリフが1380年に出した旧約聖書の序文に出てくるもの。つまり、リンカーンが考える以前にこの言葉は存在していたのだ。

学校などでの歴史の授業といえば、年号を覚えたり、教科書にそって時代のうわべをなぞる程度でしか学べないことが多い。だから、「人民の人民による…」という演説の言葉はリンカーンが考えた言葉だと思いこんでしまうのだ。

このように、歴史には、ウラを読めば続々と新たな事実が隠されている。自分の読み方しだいでは、いままで覚えていた「事実」がひっくり返ることだってあるだろう。

歴史はひとつではないのだ。

著者 裏世界史研究会

---

## はじめに

---

## 身も心も凍る世界史のミステリー

---

クレオパトラは毒蛇にかまれて死んだのか？

---

残虐な皇帝ネロの死は未練たらたら自殺だった？

---

中国・隋の煬帝が完成させた運河にまつわるおそろしいエピソード

---

悲愴な末路は「少年十字軍」の運命だった？

---

悪魔を崇拝していた？ テンプル騎士団の呪い

---

グリム童話『ハーメルンの笛吹き男』の実際は？

---

4世紀も前にすでに予言されていた宗教改革

---

ロンドン塔に見るイギリスの残虐な歴史

---

火刑にされたはずのジャンヌ・ダルクがふたたび人びとの前に登場？

---

シェイクスピアの正体はフランシス・ベーコンだった？

---

科学とオカルトは紙一重？ のニュートンの研究

---

死後に処刑？ 四半世紀もずっとさらされ続けたクロムウェルの首

---

骸骨が歴史を語る？ パリの地下に広がる墓地「カタコンベ」

---

毒殺か？ 病死か？ モーツァルトの死の謎

---

王家の血筋？ 農民の子？ 深まるカスパール・ハウザーの謎

---

ロシア・ロマノフ朝の皇女アナスタシアは生きていた？

---

犯人は誰？ リンドバークの息子の殺害事件の真相は？

---

## 世界史 意外な真相を探る

---

買収や八百長は当たりまえ？ 不正だらけだった古代オリンピック

---

古代オリンピックでは選手もトレーナーも全裸だった？

---

古代ローマではオシッコで洗濯していた？

---

歴史を変えた？ ビールで勝利を得た戦争

---

かつて女性のローマ法王がいた？

---

アルマダの海戦でスペインの無敵艦隊が敗れたほんとうの理由

---

17世紀のバブル。オランダのチューリップ投機はなぜ起こった？

---

被告はなんとウマ、ブタ、ハチ？ 大まじめに行なわれた「動物裁判」

---

史上最大のバーゲン！ ニューヨークの値段はなんと40ドル！

---

マリー・アントワネットにプロポーズしたモーツァルト？

フランス革命の始まり「バスティーユ監獄襲撃」はなんのため？

ワシントンの有名な桜の木の逸話はウソだった？

進化論を唱えたのはダーウィンだけじゃない？

なんとアメリカに皇帝が即位していた時代があった？

童話作家アンデルセンが文通していた「小さなお友だち」とは？

第一次世界大戦が起こったのは、車で道を間違えたから？

オーストリア皇太子が心中相手に選んだ女性は別人だった？

## あの有名な人物の知られざる裏話

哲学だけでは食っていけない？ じり貧だった哲学者ソクラテス

敵にも惜しまれた？ アルキメデスの死

ヴェスビオス火山の噴火を書きとめた博物学者プリニウスの好奇心

楊貴妃はほんとうに美しかったのか？

気に入らなければ離婚か処刑？ ヘンリー8世の結婚裏話

トマス・モアが描いた『ユートピア』の華麗なる世界

カクテルの名にもなったブラッディ・メアリはどんな女王？

エリザベス1世はなぜ結婚しなかったのか？

いずれも不幸な結末を迎えたフェリペ2世の結婚歴

サド侯爵は、じつはサドではなくマゾだった？

マリー・アントワネットの不幸な結婚を予言したグーテ

ヘレン・ケラーよりもまえに三重苦を克服していた人物がいた

シュリーマンの発掘の動機は彼のデッチ上げだった？

慈禧家のカーネギーはほんとうにいい人だった？

妻から逃げるために家出？ 悲愴な最期を迎えたトルストイ

「大粛清」を行なったスターリンは自分の子どもにも冷たかった？

戦争や飛行機墜落事故を経験したヘミングウェイ

## モノにまつわる不思議な話

ミロのヴィーナスの欠けた2本の腕のポーズは？

肖像画が醜く描かれていたために匈奴に嫁がされた王昭君

古代エジプトではネコもミイラになった？

火薬は失敗が生んだ産物だった？

アイスクリームやパスタはマルコ・ポーロが「発見」した？

『最後の晚餐』が完成後10年を経ずして傷みだした理由とは？

『モナ・リザ』は2枚存在する？

もうひとつのキリスト教史。「かつら」で教会は大騒動

裸体を批判され、腰布をつけざるを得なかった『最後の審判』  
タバコを吸うために戦った？ イギリスのピューリタン革命  
名器「ストラディヴァリウス」の偽物をつくったのは息子たち？  
古代エジプトのロゼッタストーンが大英博物館にあるのはなぜ？  
これぞ「珍兵器」？ 身近にあるこんなものが兵器に早変わり！  
自由の女神がアメリカに贈られたのにはワケがある？  
「テディ・ベア」とアメリカ大統領の不思議な関係  
死後3日で建てられた「レーニン廟」が意味するものとは？

## 世界史をめぐる素朴な疑問

ギザでもっとも大きなピラミッドはクフ王のものではない？  
農閑期の失業対策だった？ エジプトのピラミッド建設  
当時は受け入れられなかった？ 孔子の儒教思想  
万里の長城を築いたのは秦の始皇帝ではない？  
中国の歴史を左右した「宦官」には誰がなった？  
「チンギス・ハン＝源義経」といわれている理由とは？  
コロンブスの悲愴な最期・新大陸はなぜ「アメリカ」になった？  
タージ・マハル建立はイスラムとヒンドゥーの共存策？  
ロシアには「ヒゲ税」をとっていた皇帝がいた？  
「パンがなければお菓子を食えばいい」の誤解  
アメリカ大統領官邸が「ホホワイトハウス」と呼ばれる理由  
情報戦で富を得た？ ロスチャイルド家勃興の裏話  
あまりにも有名なリンカーンの演説は別人によってつくられたもの？  
42・195キロのマラソンの距離はだれが決めたのか？  
2回も売られた？ バリのエッフェル塔  
あの手この手で酒を楽しんだ禁酒法時代のアメリカ  
怪僧ラスプーチンがロシアで力を持った理由

## 世界史20世紀の謎

①宇宙飛行士ガガーリンの死因は飛行機事故？  
②帰国後、別人になりすましたアラビアのロレンス  
③アインシュタインがイスラエル大統領候補？  
④刑務所ではおとなしかった？ 暗黒街の帝王アル・カボネ

## 身も心も凍る世界史のミステリー

### クレオパトラは毒蛇にかまれて死んだのか？

歴史上、美女と呼ばれる女性はいくさんいるが、クレオパトラはそのトップランクのひとりだろう。古代エジプト、プトレマイオス朝の最後の女王で、その美貌でカエサルを魅惑し、のちにアントニウスと結婚して東方の女王として君臨した。

そんな彼女の最期は自殺だった。アントニウスが敗れると、そのあとを追ってみずからを毒蛇にかませて自殺したとされている。

美しい女性は、死ぬときにも美しく死にたいと思うのだろうか。彼女は日ごろから、苦痛なしに美しく死ぬる方法を研究していたという。その結果、毒蛇の毒がもつとも確実に死ぬことができ、しかも激しい苦痛も痙攣も引き起こさないことがわかった。そこで、これを使って自殺することにしたのだ。

だが、彼女がどんな状況で自殺したのかはよくわかっていない。毒蛇がイチジクの実の下に隠されて運び込まれたという説もあれば、花の下に隠されて運び込まれたという説もある。また、その籠にはイチジクだけでなく、ブドウもはいつており、その下に毒蛇を隠したという説もある。

毒蛇の種類についても、コブラだという説もあれば、そんな強い毒を持った毒蛇はエジプトにいなかったという説もある。

さらに、クレオパトラがどこを毒蛇にかませたのかもよくわかっていない。シェイクスピアは唇だったと主張するが、胸だったという学者もいる。

こうした数々の疑問から、じつはクレオパトラは毒蛇にかませて自殺したのではなく、イチジクに注入されていた毒で死んだとか、髪に刺していたピンに仕込まれていた毒を飲むか、肌に刺して死んだ。あるいは、一酸化炭素中毒で死んだなどという説も登場している。絶世の美女と呼ばれただけに、憶測され、その死もミステリアスなのである。

### 残虐な皇帝ネロの死は未練たらたら自殺だった？

いくら勇猛果敢な人物でも命が惜しくないはずがない。せめて死に際はみごとに願っても、実際はカッコ悪くうろたえたりするものだ。

古代ローマの歴代皇帝のなかでも、暴君として名高いのが紀元54年に即位したネロ。初めは善政を行なったが、のちに母と皇后を殺し、また、ローマ市の大火のときにはその罪をキリスト教徒に負わせて迫害した。ライオンを放した競技場にキリスト教徒を入れ、観客席で死の叫びを聞いて喜んだというエピソードも残っている。

そんな狂気の皇帝ネロも、68年、30歳で生涯の幕をとじる。あまりの暴君ぶりに反乱が起き、元老院が彼を皇帝の地位から追放してしまうのだ。命からがら逃げ出したネロは、ローマ近郊の家臣の館にかくまわれたが、人びとの追及の手はすこしも揺るがない。もはや残虐なやり方でネロを殺さなければ、民衆は納得しない。

そんな状況を察し、ネロに従った直属の家臣たちは、皇帝らしく自殺することを勧める。

ネロも納得して、自殺の準備を行なうことを命じた。だが、その命令はとにかく細かなものだった。死んだのちに墓が必要だから穴を掘ってくれ。遺体を清める水を用意してくれ。火葬用の薪を取ってきてくれ……。なんのことはない、ただ時間稼ぎをしていただけなのだ。

それでも、いつまでも時間が稼げるはずがない。準備はすべて整った。もうあとはおとなしく死ぬしかない。だが、それでもネロはまだ決断できなかった。

「さあ、死のう」

「いや、ちょっと待て。まだ死にたくない」

「さあ、早く」

「まだだ、まだだ」

そんなことを自問自答し、ただ時間をやり過ごすだけ。いざ刀を抜いてみても、刃先を自分に向けることができない。

そんな彼の未練もとうとう通用しなくなった。搜索隊がすぐそばまでやってきたのだ。

これではもうどうしようもない。搜索隊のひづめの音を聞いたネロは、ホメロスの叙事詩『イリアス』の一節「早駆けの馬蹄の響き、わが耳を打つ」を口ずさみ、やっとのこと剣をノドに突き刺して自害した。

暴君といわれた人物にしては、みつともない死に様である。しかし、誰だって命は惜しい。未練たらたらなのもしかたないかも？

## 中国・隋の煬帝が完成させた運河にまつわるおそろしいエピソード

広大な国土を持つ中国。それだけに昔から壮大な建造物がいくつもつくられてきた。隋の煬帝（在位604～618年）が建造した大運河もそのひとつだ。

現在の大運河は、元代に修復完成し、全長約2000キロ。黄河、淮水、揚子江といった中国の主要な大河を貫き、南北交通運輸の大動脈として活躍しているが、煬帝の建設目的は自分の遊行のためだったといわれている。

建設工事は延べ540万の男女を集めて行なわれた。すでに部分的にできていた運河を結んで、604年から掘りはじめ610年に完成した。そして、この大工事の陰におそろしいエピソードが隠されているのだ。

工事にあたっては、征北大総官という地位にあった麻叔謀という人物が総監督に任命された。彼はとても貪欲で、強引な性格の男だった。そのためがむしやりに工事を進め、多くの人びとの反感を買った。その天罰が下ったのか、やがて彼は病気になる。症状は悪化したが、ある呪術師のおかげで快方に向かった。

その後、彼の周囲で奇妙な事件が起きる。村はずれで遊んでいた幼い子どもが家に戻らず、行方不明になったのだ。それをきっかけにつぎつぎと村の子どもが姿を消した。そして、やがて現場復帰した麻叔謀の宿舎から、夜ふけに幼児の悲鳴が聞こえるようになった。

役人が彼の宿舎に踏み込むと、調理場に転がっていたのは血まみれの幼児の生首と胴体。

彼は呪術師に「ただひとつ回復する方法は、幼児の新鮮な肉を生のまま食べること」とそそのかされて、それを実行に移したのだ。子どもの誘拐には、彼の家臣も協力していた。

煬帝もさすがにこの事件に激怒した。「自分の病状回復のためとはいえ、なんとという残虐なことをするのか」。麻叔謀の刑は村人たちの手にまかされ、惨殺された。大運河をめぐる世にもおそろしいエピソードである。

## 悲愴な末路は「少年十字軍」の運命だった？

成吉思汗の白虎隊の例を見るまでもなく、少年が悲劇に巻き込まれるケースはよくある。

13世紀のヨーロッパでも、「少年十字軍」という組織に多くの少年が参加し、悲愴な運命をたどった。

1212年、ロワール川中流の村に暮らす羊飼いの少年の前に、巡礼姿のキリストが現われた。少年はフランスじゅうの少年少女に呼びかけ、これに応じて各地の町や村からあつという間に3万人もの少年少女が集まった。また、ほぼ同じころ、ケルンでもやはり少年に天使のお告げが下り、彼のもとに3万人以上のドイツの子どもたちが集まった。

こうした子どもたちは、何かにとりつかれたように、親や友人が止めるのも聞かずに、無一文のままつぎつぎに家を飛び出して、この集団に加わり、ただひたすら聖地エルサレムを目指したのだ。1096年を最初として、イスラム教徒に奪われた聖地奪回を目指して遠征を行なった十字軍になぞらえて、彼らのことを「少年十字軍」と呼ぶ。

だが、彼らを待っていたのは過酷な運命だった。フランスの少年たちは7隻の船に乗って出発したが、そのうちの2隻は途中で嵐にあつて沈没。船長は残った船をアルジェリアの港とエジプトのアレクサンドリアへと向けた。そこで、子どもたちは奴隸としてイスラム商人に売り飛ばされてしまったのだ。

また、ドイツの子どもたちは、イタリアにはいつてローマ教皇に会いに行こうとしたが、厳しい真夏の行進の途中で多くの子どもが亡くなり、生き残った者もロンバルディア地方にはいるとバラバラになったり、奴隸として売られ

たりした。それを見て、ようやく聖地への旅をあきらめた子どもたちも、晩秋のアルプス山中で飢えと疲労のために、故郷に足を踏み入れるまえにほとんどが亡くなったという。

ところで、少年十字軍とはいうものの、彼らのなかには大人の姿もあった。行進の途中で、領主の館の使用人、娼婦、盗賊といった怪しげな大人たちを中心に、無産者階級の成年男女が、つぎつぎに子どもたちの行進に加わっていったのだ。

それにしても、少年十字軍の行進とは何だったのか。あれほど過酷な運命をたどるとは思わなかったにしても、その前途が険しいことはたしか。それにもかかわらず、何万人もの子どもたちがつぎつぎに参加したのは、常識では考えられない出来事だ。聖書の奇跡を信じて、ひたすら聖地回復を夢見た純粋な行動だったのか。それとも、一種の集団ヒステリーのような状態だったのか。いずれにしても子どもたちにとってはあまりに過酷な行進だった。

## 悪魔を崇拝していた？ テンプル騎士団の呪い

秘密めいた組織というものは、外部から見ればなんとなく無気味に思えるものだ。かつてヨーロッパで勢力を誇っていた「テンプル騎士団」も、人びとからはおそろしい集団だと思われていた。

テンプル騎士団が誕生したのは1118年。8人のフランス騎士が聖地を巡礼する人たちの保護を目的に創設した。最初は軍事的な組織だったが、その後、新形式の騎士修道会として認可され勢力を拡大していった。騎士団の内部では一定の戒律が団員たちに課せられていて、その結束や忠誠心は外部の人が驚くほど強かった。しかも、銀行家や財務官など社会的、経済的地位が高いメンバーが多かったこともあって、活動資金はどんどん膨らんでいった。一時は9000カ所もの土地を所有するなど、大地主でもあったのだ。

だが、彼らの勢力が大きくなるにつれて、人びとのやつかみの声が強まった。内部の実態がよくわからなかったため、オドロオドロしい噂まで流れるようになった。

彼らは魔術を使っている。美女に化けた悪魔と寝ている。悪魔の肛門にキスしたことがある。騎士団の入会式では出席者どうしが互いの唇、へそ、尻にキスをしている。十字架にツバを吐いて悪魔崇拝の儀式をしている。新人団員に死者の灰を食べさせている。悪魔と契約して、聖地をイスラム教に明け渡し見返りに、勢力と富を保護してもらっている。そんな噂まで登場した。

やがて、そんな非難がテンプル騎士団を追い詰める。1307年、莫大な財産の没収を狙うフランス王フィリップ4世によって5000人のメンバーが逮捕され、異端訴訟の被告にされてしまった。そして、1312年には教皇クレメンス5世の行政処分によって廃絶。全財産はヨハネ騎士団に移管され、最後の総会長は火あぶりにされてしまったのだ。

総会長は死の間際に呪いの言葉を吐いたという。

それから33日後に教皇クレメンス5世が亡くなり、さらに、教皇の死から7カ月後にはフィリップ4世が死亡。それをきっかけにカペー王家は急速に衰退しやがて直系が断絶したことから、王位継承をめぐる英仏間の争いが起こって、フランス全土が100年近くも大混乱に陥った。人びとは、こうしたことはすべて総会長たちの呪いによるものだと噂した。

そればかりか、500年近くもあとにカペー王家の末裔にあたるルイ16世がパリでギロチンにかけられたのも、テンプル騎士団の呪いによるものだと主張する人まで現われた。

はたして、テンプル騎士団はほんとうに悪魔と関係があったのか。いまでも真相は不明だ。

## グリム童話『ハーメルンの笛吹き男』の実際は？

グリム童話でおなじみの『ハーメルンの笛吹き男』は、とても悲しい伝説。1284年、ネズミの害で困っていたドイツ北部の町ハーメルンに、けばけばしい色の服を着た男がやってきて、報酬をくれればネズミを退治するという。そこで人びとが話に乗ると、男は不思議な笛を吹いてネズミを誘い出して川で溺れさせるが、人びとは報酬をケチって男を追い出してしまう。すると、男は町に戻ってきて、今度は130人の子どもたちを誘い出し、町の外に連れ出してしまう。結局、子どもたちは二度と戻らなかった……。



この話がいつごろできたものかよくわからないが、子どもの失踪とネズミとり男の話がドッキングしてできたと考えられている。とくに、ネズミとり男の話は各地にたくさん残っているが、これは当時のヨーロッパでネズミの被害がそれだけ大きかったためらしい。

そうした話に共通するのは、ネズミとり男がみんな外から来たよそ者だということ。ハーメルンの笛吹き男の服が派手なもの、彼がよそ者だったことを表わしている。また、ハーメルンでは実際にたくさんの子どもがいなくなったらしい。その原因については、さまざまな説がある。たとえば、1212年の少年十字軍への参加、あるいは疫病による子どもの大量死、舞踏病に冒された子どもたちの行列などに関係があるといわれている。

一方、町からいなくなったのは、ほんとうは子どもたちではなくて若者だったという説もある。それはゼーデミュンデの戦いに加わって戦死した若い男たちで、笛吹き男は彼らの隊長だったというのだ。

さらに、いなくなったのは植民者たちだという説もある。笛吹き男は東方に入植する若者を募集する係で、募集に応じた若者は洗礼者ヨハネの祝日である6月24日に、笛吹き男に導かれて東門から行列を作って出ていったという。彼らの目的地はモラヴィア地方だったともいわれている。

このようにさまざまな説があるものの、真相はよくわかっていない。ただし、現実にも子どもか若者が町からいなくなったことは確かなようだ。この話と、ヨーロッパにたくさんあるネズミとり男の話が結合して、『ハーメルンの笛吹き男』の悲しい話ができたらしい。それが16世紀ごろからどんどん広まって、世界的に有名になったのである。

ちなみに、現在のハーメルンは工業都市として栄えている。それでも、笛吹き男が町から子どもたちを連れ出したといわれる通りは、「舞楽禁制通り」といって、いまでも楽器を演奏したり、歌を歌うことが禁止されているとか。

#### 4世紀も前にすでに予言されていた宗教改革

キリスト教における大事件といえば、まずあげられるのは「宗教改革」だろう。これは、ヨーロッパ近世の初頭、カトリック教会の弊害に対して改革を企て、そこから分離してプロテスタント教会を立てた宗教運動である。1517年、ルターが『95カ条の抗議文』を出し、聖書を正しい信仰の唯一の基礎とする立場から、献金すれば罪が許されるとする教皇の免許符販売を批判、教皇権を否認したことから、全ヨーロッパに広がったものだ。

しかし、この宗教改革が、なんと4世紀も前に予言されていたというから驚きである。

これを予言したのは、1136年に世界初的女子修道院の院長となったベネディクト派の修道女ヒルデガルド。彼女はみずからの幻視体験から社会の動向を予知し、ドイツの女予言者と呼ばれている。彼女の『スキウィアス（主の道の知識）』『リベル・ディビノム・オベルム（神業の書）』という本のなかに、次のような言葉があるのだ。「王子たちと国民が教皇の権威を否定する時代が来る。各国は教皇より自分たちの教会指導者を取るようになる。ドイツは二分される」

これこそが、のちに起きた宗教改革を予言するものだといわれているのだ。なかには、最後の「ドイツは二分される」というところに注目して、第二次世界大戦後の東西ドイツの分裂を予言したのではないか、という人もいる。

伝説では、ヒルデガルドは母親の胎内にいたときのことを正確に覚えていて、5歳のころから神の姿を見るようになったという。そして、数多くの予言を書き記したほか、自分が聴いたという「天界の音楽」も譜面に残している。

しかし、ヒルデガルドは超能力者というよりは、すぐれたアナリストだったのかもしれないとの意見もある。というのは、彼女が予言書のほかに、自然学や医学・薬学の知識を持ち、『自然学』という博物学と医学に関する百科全書的著作も著わしているからである。

彼女が活躍した時代は、王や貴族の権力がしだいに強まり、人びとが遠い異国にいるローマ教皇よりも近所の教会の神父を頼りにするといった傾向が表われていた。そうした社会の状況を冷静に分析して、「いつかローマ教皇の力が弱くなり、宗教上の争いが起こるかもしれない」と予測した。そうなったときにキリスト教会がどう対処すべきか、予言として書き残しておこうとしたのではないかというのだ。

将来の見通しがつきにくい現在の世界。ヒルデガルドが生きていたら、いったいどんな予言をするのだろうか。

#### ロンドン塔に見るイギリスの残虐な歴史

イギリスのロンドン塔は、かつては処刑の名所として知られた。しかし、実際は、城内で処刑されたのはわずかに7人。75人にのぼる数の処刑はすべてロンドン塔の北西側のタワー・ヒルで行なわれている。

それでは、ロンドン塔の城内で処刑されたのは誰だったか。まず皮切りは、1483年6月13日に首をはねられたヘイスティング卿ウィリアム。彼はシェイクスピアの『リチャード3世』にも登場する人物である。続いて1536年に処刑されたのが、ヘンリー8世のふたり目の王妃アン・ブーリン。さらに、エドワード4世の弟。1541年には、クラランス公ジョージの娘でソールズベリ伯夫人のマーガレット・ポール。1542年には、ヘンリー8世の5度目の王妃キャサリン・ハワードと処刑が続く。キャサリンの処刑に際しては、彼女の姦通に手を貸したというロッチフォード卿の娘ジェインも処刑されている。

その後も1554年に、九日女王として知られるジョン・グレンが処刑され、1601年にはエリザベス1世の寵臣だったエシックス伯のロバート・デヴリューが男性としては2人目の処刑者となった。そして、これが城内では最後の処刑となったのだ。

なかには、まれなケースだが、18世紀のマクスウェル卿のように処刑前夜に看守の目を盗んで逃亡に成功した人もいる。

それにしても、城内だけでもこれだけの血が流れた。処刑者はタワー・グリーンという城内の芝生の庭で首をはねられ、遺体は城内に埋められたが、首は門の外にさらされたというから、ロンドン塔の歴史は虐殺の歴史だといえるかもしれない。昔からここで幽霊の話が絶えないのも当然だろう。

とはいうものの、ロンドン塔が最初から処刑場として建てられたわけではない。もともとは、城塞であり宮殿だった。1067年にウィリアム1世が住んで以来、1625年に死去したジェームズ1世まで、エリザベス1世を除いて、歴代の国王はここに住んだのだ。

14世紀から19世紀にかけてロンドン塔は、造幣所の役割も果たしていたし、天文台でもあった。さらに、1640年までは市民の銀行でもあり、13世紀から1834年までは、なんと王立動物園でもあった。現在でもライオン・タワーという名が残っている。

そんなロンドン塔が最初に牢獄として使われるようになったのは1282年のこと。そして、やがて、14世紀以降は政敵や反逆者を処刑する処刑場となり、最後の処刑は1941年、ドイツ人のスパイであった。

### 火刑にされたはずのジャンヌ・ダルクがふたたび人びとの前に登場？

ジャンヌ・ダルクはフランスの愛国者として知られた少女。その生涯は、舞台や映画のテーマにもなっている。シャンパーニュ州の農村ドンレミに生まれた彼女は、やがて自分が敵のイギリス軍からフランスを救うために神から遣わされたと信じるようになる。

当時、ブルゴーニュ公家と結託したイギリスはフランスに侵攻。北フランスを支配し、正統のフランス王シャルル7世は南フランスに退いていた。ジャンヌはそんなシャルルを励まし、兵士たちを勇気づけ、ついに1429年にオルレアンを包囲したイギリス軍を撃破したのだ。たちまちジャンヌは救国の少女として注目されるようになった。

だが、そんな活躍も長くは続かなかった。1430年、ジャンヌはブルゴーニュの軍隊に捕えられてしまう。そして、10万フランでイギリス軍へ売り渡され、その後、異端の疑いをかけられて、ノルマンディーのルーアンで宗教裁判にかけられた。結局、彼女は魔女の宣告を受けて、わずか19歳の若さで火あぶりにされてしまったのだ。

だが、話はまだ終わらない。ジャンヌが火あぶりにされてから5年後のこと。ロレーヌにひとりの女性が登場した。年は25歳前後、それまでクロードと呼ばれていた彼女は、人びとに自分が「処女ジャンヌ」であると告げる。

つまり、火あぶりになったはずのジャンヌ・ダルクが復活したというのだ。この話を聞きつけてジャンヌの兄弟が実際に会ってみると、それは間違いなくジャンヌだったという。

その後、彼女は貴族と結婚し子どもを産む。

ところが、パリに行った際に国王によってニセモノと断定され、大勢の前で自分がニセモノであることを白状させられたという。だが、その後も地元に戻って「処女ジャンヌ」として暮らしていたという説もある。いずれにしても、世間が彼女に注目していたことはまちがいない。

はたして、ジャンヌ・ダルクはほんとうに火あぶりから逃れることができたのだろうか。

## シェイクスピアの正体はフランシス・ベーコンだった？

『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』の四大悲劇をはじめ、史劇『リチャード3世』『ヘンリー4世』、悲劇『ロミオとジュリエット』『ジュリアス＝シーザー』、喜劇『真夏の夜の夢』『ヴェニスの商人』などの多くの傑作を残したイギリスの劇作家シェイクスピア。だが、これだけ偉大な人物なのに、その正体についてはあまりにも謎が多い。

彼に関する資料はほとんど残っていない。1564年4月23日生まれといわれているものの、実際に残っているのは4月26日に教会で洗礼を受けたという記録だけ。戯曲のほとんどは匿名で出版され、遺族はその著作権からなんの利益も得ていない。遺言状でも、作品のことや蔵書のことがひと言も触れられていない。

それどころか、彼の作品の自筆原稿がまったく発見されていないのだ。わずかに署名がいくつか残されているが、それらはひどい悪筆でとても教養のある人物が書いたとは考えられず、なんらかの理由でわざと筆跡をごまかした疑いも浮上している。

こうしたことからささやかれているのが、「シェイクスピアの作品を書いたのは別人ではないか」というウワサ。そして、その正体については劇作家や貴族などさまざまな説があり、複数による執筆説まで登場しているのだ。

そんななかでもっとも有名なのが、シェイクスピアと同時代の文化人であるフランシス・ベーコンがその正体ではないかというもの。近代科学の父といわれる彼は、16世紀のイギリス有数の科学者であり、哲学者でもあった。それだけに、シェイクスピア作品を書くのに必要な知識や教養は十分に持っていたと考えられている。また、彼の蔵書のなかには、シェイクスピア作品に登場する逸話や引用句などが、すべて含まれているともいわれている。

現在残っているシェイクスピアの肖像画は、それぞれがあまり似ていない。このこともシェイクスピアをミステリアスにしている理由だが、そのなかで、ドルーシャウト作のシェイクスピア像はベーコンの肖像画とそっくりだという。

このように「シェイクスピア＝フランシス・ベーコン説」を信じる人が多いのだが、その半面、両者の性格があまりにもちがうことなどから、この説を真つ向から否定する人もいる。たとえば、『真夏の夜の夢』や『十二夜』の作者は、気持ちのやさしい人物だと考えられるが、ベーコンにそうした優しさはなかったというのだ。

ほんとうのシェイクスピアの正体についてはいまも不明。それでも、彼の戯曲はいまだに不滅。まさに歴史に残る大傑作なのだ。

## 科学とオカルトは紙一重？ のニュートンの研究

テレビ番組で、科学者と自称超能力者が激論を交わしていたりする。科学とオカルトは正反対のものというのが一般的な常識だ。

だが、そんな常識を覆すようなエピソードがある。リングが木から落ちるのを見て、万有引力を発見したといわれる「近代科学の父」アイザック・ニュートンは、意外にもオカルト的なものにたいへん興味を持ち、錬金術などの研究に没頭していたという。

ニュートンは、1642年にイギリスで生まれた。物理学者であると同時に、天文学者、数学者としても活躍。力学理論を打ち立て、万有引力の原理を導入。また、微積分法を発見し、光のスペクトル分析などの業績でも知られている。

そんな彼が亡くなったのは1727年。死後に残された膨大な論文や研究ノートなどを買い取ったのは、有名な経済学者のケインズだ。

彼は、「ニュートンは理性の時代の最初の人ではなく、最後の魔術師であった」といつている。なにしろニュートンの研究内容には、錬金術をはじめとしてオカルト的なものがあまりにも多すぎた。しかしケインズは、それを公表しようとしなかった。こんなものを発表したら、「近代科学の父」というニュートンの名まえに傷がつくのみならず、世間が大騒ぎになると考えたからだ。そのため、ニュートンのオカルト好きは、長いあいだごく限られた人しか

知らない秘密だったのだ。

ちなみに、ニュートンが研究した錬金術とは、古代エジプトに起こり、アラビアを経てヨーロッパに伝わった原始的な化学技術。金属を金や銀などに変化させたり、不老不死の万能薬をつくることを目指したまさに呪術的なものだったのだ。

一見、無関係に思える科学とオカルトだが、日本でも反オカルト派の科学者が火の玉の研究をしたりするのだから、まったく無関係ではないのかもしれない……。

## 死後に処刑？ 四半世紀もずっとさらされ続けたクロムウェルの首

さらし首といえば気味が悪いが、たいていはしばらくたつと片づけられる。ところが、なんと四半世紀もさらされ続けた首があるのだ。

オリヴァー・クロムウェルはイギリスの軍人で政治家。1642年に起きた内乱の際、議会軍を率いて王軍を破り、1649年にチャールズ1世を処刑して共和制を敷いた。その後は、1653年に護国卿に推されて独裁権を手に入れるなどしたが、1658年に亡くなり、ウェストミンスター・アベイに埋葬された。

遺体には防腐保護措置が施され、正装で安置された。高貴な法衣に包まれ、枕頭には冠、金球などが飾られるという国王並みの待遇。葬儀も国王以上に盛大なものだった。

ところが、王政復古が実現してチャールズ2世が王位につくと、彼はピューリタン革命の関係者に対しては穏便に扱うという約束をしたものの、国王殺しの関係者は別だと主張。

チャールズ1世を処刑したクロムウェルらの遺体を墓から掘り出して、あらためてタイバーンで絞首刑にした。日没まで絞首台にぶら下げてさらし者にし、首をはねたのだ。

すでに死んでいる人を絞首刑にするというのだから、すごい執念である。それほど彼らが憎かったのだろう。おまけに、タイバーンでの処刑とは、ロンドン塔などで行なう処刑とちがって、ならず者と同じような扱いを意味していた。

だが、復讐はまだ終わらない。処刑にあたって、クロムウェルたちの胴体は深い穴に蹴り込まれたが、首だけは市内へ運ばれた。そして、ウェストミンスター・ホールに釘刺しにしてさらし首にされた。それも、期間限定ではない。ずっとそのまま、なんと25年間もさらされつづけたのだ。

さて、そんな首に新たな運命が訪れる。防腐処理を施していた首も長年の風雨で傷み、ある嵐の夜にとうとう梁から転げ落ちた。そして、たまたまそこを通りかかった歩哨が拾って家に持ち帰った。ようやくさらし首の身分から解放されたわけだ。

しかし、まだまだ首は数奇な運命をたどる。それからしばらくして、見世物小屋の主人を経て3人の買い手に売却され、ロンドン市内で見世物にされた。またまた人目にさらされることになったのだ。

その後は、ある医師が購入し、現在はその医師の家が保存しているとも、クロムウェルの子孫が保存しているともいわれている。いずれにしても、ようやくさらし首でなくなったことだけは確かなのである。

## 骸骨が歴史を語る？ パリの地下に広がる墓地「カタコンベ」

おしゃれなイメージのパリの地下には、ちょっと変わった観光スポットがある。「カタコンベ」という共同墓地だ。墓地といえば墓石が並ぶ風景を連想しがちだが、ここは正確に言えば納骨堂。地下の通路に沿ってむき出しの骨がずらりと納められているのだ。

まず、入口で入場料を払いガイドについて入口から地下の通路へ。103段の階段を下りていくと、そこは一年じゅう11～12度という涼しい世界。最初はふつうの通路だが、しばらく進むとこう書かれている。

「心せよ！ 諸君はいま、死の帝国に入ろうとしている」

この言葉の掲げられている入口は「地獄門」と呼ばれている。そこをくぐると通路の両側の壁には、埋葬者の手足の骨や頭蓋骨が、整然と積み上げられている。ただ積み上げただけでなく、頭蓋骨を利用して、十字架をはじめとしてさまざまな模様を描いたところもある。こうした通路が約800メートルも続くのだ。

通路は迷路のように入り組んで、油断すると迷子になってしまいそう。この場所はその昔、石灰岩を切り出す採石場だった。その石灰岩がパリの建設に使われたのだ。そのころに、好奇心から入り込んで1年後に白骨で発見された人もいたという。そうした危険性があるため、いまはメインの通路以外は柵でふさがれている。

ここに納骨された遺体は全部でなんと600万。現在、パリの中心部の人口が約200万人というから、いかにスケールの大きな共同墓地かわかるだろう。

カタコンベができた背景にはパリの人口増加がある。人口が増えれば死者も増える。パリには無縁墓が急激に増え、死体の腐敗や感染による被害が問題になってきた。そこで、地下の採石場を新しい無縁仏の墓に決定。1786年4月7日に、モトレ、マイエ、アスランという3人の神父の聖なる祝福の儀式とともに、各地の無縁墓から遺体の搬送が行われたのだ。

カタコンベが建設されたのは、18世紀から19世紀のフランス革命の真っ最中で、革命戦争の犠牲者もここに埋葬されている。たとえば、1778年に内閣が倒壊した直後に起きたブリエヌ屋敷の外やグレーブ広場での市民暴動の犠牲者。翌年のフォーブル・サンタントワヌのレヴェイヨン大壁紙工場での一揆の犠牲者。1792年にチュイルリー宮で起きた王党派と革命派とのあいだの戦闘の犠牲者などだ。ナポレオン3世やドイツのビスマルク宰相も訪問したというこの地下墓地は、パリの歴史を刻む場所でもあるのだ。

## 毒殺か？ 病死か？ モーツァルトの死の謎

オーストリアの作曲家でウィーン古典派の巨匠、モーツァルトの死には謎が多い。

1791年12月5日、35歳の若さで亡くなったモーツァルトの死因は病死。だが、その病名は「粟粒疹熱」をはじめ五つも挙げられていて、ほんとうのところはよくわからない。

だいいち「粟粒疹熱」にしても、現代にはない謎の病気。そして、遺体は埋葬の翌日に家族の立ち会いもなく急いで埋葬されたものの、すぐに墓地から消えてしまったのだ。

こうしたことから、昔から根強いのが毒殺説。とくにライバルである官廷楽長サリエリによって毒殺されたとする説は、大ヒット映画『アマデウス』などで取り上げられて有名になった。

そして、もう一つの有名な毒殺説が、フリーメーソンによる暗殺説だ。秘密結社のフリーメーソンでは、音楽が儀式にとって欠かせないものだった。そのため、モーツァルトをはじめ有名な作曲家が積極的に協力。しかも、モーツァルト自身が死の7年前にフリーメーソンに入会していた。

モーツァルトが作曲したオペラ『魔笛』が、フリーメーソンと関係があるといわれるのもこのため。この曲には、楽曲全体にフリーメーソン内部の秘儀やシンボルがたくさんちりばめられていて、フリーメーソンの密議参入のオペラといってもいいほどだという。ところが、フリーメーソンでは秘密を暴くのはタブー。モーツァルトのこの行為は上層部をひどく刺激したという。

そこでフリーメーソンは組織を守るために死刑宣告人を派遣して、モーツァルトを暗殺。

彼が死の直前に作った『レクイエム』は、「灰色の服の男」が訪れて作曲を依頼したものだといわれているが、その男こそがフリーメーソンの死刑宣告人だったというのである。

モーツァルトは死の直前に水銀中毒に特有の症状を示していたともいわれるが、水銀による毒殺はフリーメーソンの密儀の中にある処刑法だという人もいる。

このほかにも、『ドン・ジョバンニ』のように、封建社会を否定したり、貴族を否定するような作品を書いたことが、貴族たちの怒りを買って暗殺されたという説。また、ほんとうはやっぱり病死で、直接の死因は病気の治療のために血を抜く瀉血によって、大量の血が抜き取られたことにあるとする説などさまざまな説が唱えられている。

病死か、毒殺か。モーツァルトの死は謎だらけ。肝心の遺体が消えてしまっただけに、これからも論争は続きそうだ。

## 王家の血筋？ 農民の子？ 深まるカスパール・ハウザーの謎

1828年、バイエルン王国のニュルンベルグに、一人の少年が現われた。年は16歳ぐらい。生後間もない幼児の



ようなヨチヨチ歩きで、ろくに話もできず、知能は極端に低かった。彼の名はカスパール・ハウザー。人びとは彼を「謎の野生児」と呼んだ。

カスパールには不思議なことがまだまだあった。一度も靴をはいた経験がないようだが、足の裏は真っ白でスベスベしていた。夜は背中を真っ直ぐにして座ったまま眠る。極端に敏感な体をしていて、金属製のものを近づけるとたちまち全身に激しい悪寒が走る。どこにいても北と南をすぐに指さすることができる。人が背後から近づいてくると、背中に磁気のようなものを感じて鳥肌が立つ……。まさにミステリアスな少年だったのだ。

やがてカスパールは地元の名士であるダウマー教授の家に引き取られる。そこで、読み書きや計算、ピアノなどを驚くほどの速さで身につけていく。ところが、しばらくして彼の身に異変が起きる。地下室で血を流して倒れているところを発見されたのだ。人びとは、彼を監禁していた男が秘密がバレるのを恐れて殺そうとしたのではないか、などと噂しあった。

さらに、1833年、彼はふたたび何者かに襲われて、左胸を刃物で刺されてしまう。

そして事件の3日後に21歳の短い生涯を閉じたのだ。現場付近で怪しい男を見たという証言もあったが、凶器は発見されなかった。

カスパールが亡くなると、彼の出生をめぐるさまざまな説が登場した。バイエルン王国と一国をはさんで隣り合うバーデン大公国で、1812年に王子が生まれた。だが、彼は生後17日目に死んでしまう。この王子がカスパールではないかというのだ。当時、バーデン大公国では権力争いが起きていて、大公位乗っ取りを企む王妃ルイーゼの一味が前妻の子である第一王子の子を誘拐して、ほかの赤ん坊の死体とすりかえた。そして、目的達成まで王子を監禁し、その後、解放したものの、悪事がバレるのを恐れて殺してしまったというのである。カスパールが監禁されていたという城が、後世、発見されている。

だが、彼はそんな高貴な血筋など引いておらず、農民の子だと主張する人もいる。大地主の息子に見初められた娘が、玉の輿を逃さないために、不義の子であるカスパールを隠すために監禁したというのだ。

なかには、襲撃されたこともほんとうはカスパールの自作自演によるものだと主張する人もいるなど、謎は深まるばかり。いったいカスパールはどこから来たのだろうか。

## ロシア・ロマノフ朝の皇女アナスタシアは生きていた？

ロシア革命前夜のロシアでは、皇帝が絶対権力を持つ旧体制を守ろうとする者、皇帝の権力を制限する憲法をつくって立憲君主制を目指そうとする者、急進的な革命を目指そうとする者などがひしめき合っており、さまざまな事件が起こっていた。

1917年3月（ロシア暦2月）には「二月革命」が起き、ロシアの労働者・兵士らが皇帝の専制政治を打倒。これによってエロイ2世が退位。ロマノフ王朝が倒れ皇帝一家は軟禁された。

だが、このときできた臨時政府は思うような成果をあげられなかった。そのため市民の不満がふたたび高まり、同年10月には「十月革命」が起きた。レーニンらの指導するボルシェヴィキがベトログラードで武装蜂起し、それが全国に波及。ケレンスキー臨時政府が倒れてボルシェヴィキ政権が樹立された。

皇帝一家は1918年4月にウラル州エカテリブルクへ移されたが、彼らが反革命軍の手に渡ることを恐れたモスクワの中央政権は殺害を決定。7月16日の夜に、皇帝一家7人に加え、侍医、コック、召使いなど、11人全員が監禁されていた家の地下室で銃殺されてしまった。遺体はトラックで鉱山の廃坑に運ばれ、そこで焼かれたといわれている。

ところが、ここで驚くべき話が登場する。やがて、「私はあのとき死んだはずのアナスタシア姫だ！」という女性が現われたのだ。彼女によれば、殺害された皇帝一家の遺体をトラックに載せる際に、かすかに動いた遺体があったという。兵士の一人がこれに気づいて別の荷車に積んで、農家に運んだところ息を吹き返した。それがアナスタシア姫だったというのだ。

この「自称アナスタシア姫」は身分確認の裁判を起こした。もしも認められれば、イングランド銀行に預けてあった皇帝の財産が彼女のものになる。だが、裁判ではこれといった証拠は出ず、彼女の話を否定する人が多かったた

め、結局敗訴してしまった。それでもいまでも「彼女が本物のアナスタシアだ！」と信じている人がいるのだ。

当初、皇帝一家殺害の事実、国際世論を恐れた政府によって明らかにされず、遺体を埋めた場所もわからなかった。現在では、その場所も特定され、DNA鑑定で皇帝一家の遺体だと確認されている。だが、そこにあったのは9体だけで、皇女マリヤと皇太子アレクセイの遺体は見つからなかったという。つまり、生きているのはアナスタシアではなく、マリヤとアレクセイかもしれないわけだ。

## 犯人は誰？ リンドバーグの息子の殺害事件の真相は？

「翼よ、あれがバリの灯だ」の名ゼリフで知られるチャールズ・リンドバーグは、1927年5月20日から21日にかけて、ニューヨークーバリ間3600マイルの単独無着陸飛行に成功。当時25歳の無名の青年が、一躍スーパースターの仲間入りをした。

だが、そんな輝かしい栄光の先に悲劇が待ち受けていることを、当時の彼が知るはずもなかった。

大西洋横断飛行の成功によって人びとの賞賛を浴びたリンドバーグは、1929年には女性パイロットのアン・モロウと結婚。ががて長男のチャールズ・ジュニアが誕生し、幸せの絶頂にあった。

ところが、そんなある日、突然の不幸が彼を襲う。1932年、家族で休日を過ごしていた別荘からチャールズ・ジュニアが何者かに誘拐されてしまったのだ。

犯人は身代金5万ドルを要求。しかし、事件がマスコミに漏れたために大騒ぎになり、犯人からの連絡が途絶えてしまった。その後、しばらくして犯人の指示があり、リンドバーグらは5万ドルを用意して墓地へ。ところが、犯人と思われる男は、赤ん坊のいる場所を書いた紙を渡しただけで、金の入った木箱を持って逃走してしまったのだ。

渡された紙片に書かれた場所に駆けつけてみたものの、赤ん坊が乗せられているというヨットはどこにも見当たらない。なんの手がかりもないままにいたずらに時間だけが過ぎ、それから1カ月余りたつて、ようやく発見された赤ん坊は、すでに死体になっていたのである。

このドタバタ劇にあせった警察は、必死で犯人を探した。そして、ドイツ系アメリカ人のブルーノ・ハウプトマンを逮捕。彼は頑強に犯行を否定、これといった決定的な証拠も見つからなかったが、結局1934年に処刑されてしまった。

それでも、彼を有罪にする証拠が乏しかったことから、いまでも事件の真相に疑問を持つ人が多い。1993年には、『世紀の犯罪』という本が出版され大きな話題を呼んだ。

その中では衝撃の推理が展開されている。なんと赤ん坊を殺したのは実の父親のリンドバーグで、彼は間違っ子どもをハシゴから地面に落としてしまったために、その責任逃れのために誘拐をでっち上げたのではないかというのだ。

いったい事件の真相はどこにあるのか。犯人とされたハウプトマンが処刑され、リンドバーグも1974年に死亡したいまとなつては、真相は謎のままだ。

## 世界史 20世紀の謎① 宇宙飛行士ガガーリンの死因は飛行機事故？

1961年にボストーク1号に乗って人類初の宇宙飛行をした旧ソ連の宇宙飛行士ガガーリン。「地球は青かった」というセリフはあまりにも有名だが、彼のその後は意外に知られていない。

というのも、ガガーリンが1968年、ジェット機の飛行訓練中の事故で亡くなっているからだろう。彼の乗ったジェット機は、高度5600メートル上空から滑走路に向かって降下中に、大型軍用ジェット機とニアミスを起こして、その気流にあおられ、雲の中に突入。管制塔からの情報を頼りに、なんとか雲を出て着陸しようと思ったガガーリンだが、予想より高度が低かったために飛行機は地面と激突。彼はそのまま帰らぬ人となってしまったのだ。

彼の遺灰はクレムリンの壁の中と、彼が育った町の近くの町に葬られた。その町は現在「ガガーリン」という名

えになっているという。

旧ソ連の情報のベールが厚かったため、1988年ようやく公表された。



## 世界史 意外な真相を探る

### 買収や八百長は当たり前？ 不正だらけだった古代オリンピック

ドーピングなどの不正疑惑がたびたびもち上がる現在のオリンピック。ところが、そのルーツになった古代オリンピックも不正に満ちあふれていたという。

なにしろ古代オリンピックの勝者には、巨額な金と名誉がもたらされた。故郷の都市から凱歌とともに迎えられ、選手だけでなく家族までも市役所で毎日、正餐をとる終身の権利を得ることができた。また、年金が支給されたり、租税が免除されたり、ズバリ賞金がもらえることもあった。その金額は、ひとりの兵士が2年間兵役についてようやく手に入れられるほどの金額だったという。

そして、オリンピックの勝者には、ゼウス神の神殿のそばに自分自身の彫像を建てることが許され、その勝利は文字板に刻まれて展示された。現在、オリンピアの遺跡から出土するスポーツ像の多くは、そうした勝利者の像だ。

これほどの富と名誉が得られるのだから、八百長などの不正は日常茶飯事。汚い手を使ってでも、どうにか勝利者になろうとする選手が続出した。

だいたい競技のルーツから不正話が登場している。ギリシア神話のヘロス（ヘラクレスの伯父）のケース。彼はオイノマスの娘に夢中になり、娘を嫁にくれるように頼んだ。これに対してオイノマスは自分と戦車競走をして勝てば嫁にやろうといった。だが、オイノマスは戦車の名選手で、ヘロスに勝ち目はなかった。そこで、彼は競走の前に、オイノマスの戦車の車輪を緩めておいた。おかげで、オイノマスの戦車は途中で車輪がはずれ、ヘロスはみごとに大勝利。勝利の栄誉とともに、妻も手に入れることができたのだ。

この戦車競走がやがて古代オリンピックの主要な種目になった。つまり、もともと古代オリンピックは不正と縁が深かったのだ。古代オリンピックがこの始末だったというのは、想像がつくだろうか？

### 古代オリンピックでは選手もトレーナーも全裸だった？

現在のオリンピック大会の原型になったといわれる古代オリンピック。当時のギリシアには、オリンピア、デルフィ、コリント、ネメアと、大きな競技会が四つもあった。それぞれが4年ごとに開催されたため、毎年どこかで大会が開かれていたことになる。そのなかでも最大の競技大会がオリンピアだった。

古代オリンピックには近代オリンピックとちがう点がたくさんあるが、なかでも大きくちがうのが選手の服装。当時の選手はなんと全裸で競技を行なったのだ。それどころか、やがて付き添いのトレーナーまで裸にならなければいけなくなった。観客は競技を楽しむと同時に、こうした選手やトレーナーの裸を見て大いに楽しんだ。既婚の女性は入場を禁止されていたが、そうした女性たちも像に残された優勝者の裸体美を楽しんだという。

選手が裸で競技するようになった原因についてはいくつかの説がある。

まず、「スタディオン競走」と呼ばれた短距離走で、優勝者がゴールを通過した瞬間に着衣が脱げてしまったことが原因だとする説。これに対してライバル選手が、競技規則違反だと抗議したものの審判団は受け入れず、それをきっかけにすべての選手が全裸で競技するようになったというのだ。

また、長距離走での出来事が原因だとする説もある。スパルタのアカントスという選手がゴール前で抜かれそうになったときに、邪魔になった着衣を自分で脱ぎ捨ててしまった。

その結果、彼はライバルにわずか1歩の差で勝利。これをきっかけに、すべての選手が裸で競技するようになったというのである。

一方、トレーナーが全裸になったことについては、母の過剰な愛情が原因だったとする説がある。前388年の第98回大祭のとき、競技に出場する息子のことが心配になった母親が、トレーナーに変装して競技場内までついてきた。当時女性は神域内にはいることを禁止されていたので、苦肉の策として変装をしたのだ。ところが、運悪く着衣の裾が乱れて女性であることがバレてしまった。そのため、彼女は逮捕されてしまい、審判団の判定を受けることに

なった。幸い厳重な注意だけですんだものの、それ以降は女人禁制を徹底させるために、選手だけでなくトレーナーも全裸になることが決められたというわけ。

なにしろ大昔の話だけに真相は不明だが、いかにもありそうな話ではある。それだけ選手も周囲の人たちもオリンピック競技に熱中していたのだろう。時代は変わっても、オリンピックが人びとを熱くさせることには変わりがないようだ。

## 古代ローマではオシッコで洗濯していた？

洗濯は洗剤を使っているものだが、その洗剤が発明されるまではいったいどうしていたのだろうか。

ここに衝撃的な事実がある。古代ローマ時代には、洗剤の代わりになんと人間のオシッコを使っていたというのだ。

当時ローマでは、クリーニング店の原型ともいえる洗濯屋が店を構えていて、人びとはそうした店に洗濯を頼んでいた。店ではオシッコを集めてそれを洗剤代わりに利用していた。1世紀ごろには、店が集めたオシッコに対して、ベスパシアヌス帝が課税したという記録も残っている。

人のオシッコは、水・尿素・ナトリウム・カリウム・塩素イオン・アンモニアなどを含む。このオシッコを発酵させると、バクテリアの働きによって塩基性の洗剤と同じように、界面活性剤が生成される。この成分が洗濯物の汚れをパッチリ落とすというわけ。とくに脂の染み込んだ服には効果バツグンで、その効果は天然の炭酸ソーダと同じであったという。まさに先人たちの偉大な知恵だ。

じつは古代ローマで、オシッコが洗剤として使用されていたことはかなり以前からわかっていた。それは、79年8月、ベスピオス火山の噴火によって、一瞬のうちに灰に埋まったポンペイの遺跡から、そうした痕跡が発見されているからだ。

ポンペイは上下水道が整備された近代的な都市で、共同洗濯場も完備されていた。その共同洗濯場では各ブロックごとに水だめをつくり、そこから水を引いていたのだが、水だめの端に残っていたカスを分析したところ、人間のオシッコが検出されたのである。

ちなみに、この遺跡からは、ほかにも多くのものが発掘されていて、当時の人びとの日常生活を知る貴重な手がかりとなっている。火山灰の下に閉じ込められたため、当時の形そのまま残されたというわけだ。

こうしたオシッコを使った洗濯法は、その後もずっと受け継がれてきた。イギリスでは、19世紀まで、毛織物の洗濯に使われていたという。現代の感覚からすればちょっと汚い気もするが、洗剤が発明されていない時代の立派な知恵だったのだろう。

ただし、洗濯にオシッコを使うことに抵抗がなかった古代ローマ人も、さすがに自分の体を洗うのには抵抗があったのかもしれない。彼らが体を洗うのに使ったのは、オシッコではなく、灰汁や天然ソーダ、アルカリ塩などだった。

## 歴史を変えた？ ビールで勝利を得た戦争

世界中で愛されているお酒といえば、やっぱりビール。そのビールが戦争の行方を大いに左右するという事件があった。

1413年、イギリスではヘンリー5世が即位した。彼は、かつての領土の回復を目指して、パリに使者を送り、フランスに挑戦状を叩きつけた。だが、これが法外な要求だったため、フランス皇太子ルイはヘンリーに「ヤツには戦場よりもテニスコートのほうがお似合いだ」とテニスボールを送って、果たし状の代わりにした。

じつは、ヘンリーは日ごろから怪しげな連中とつきあっていて、ロンドンの下町の売春宿に出入りしたり、当時は下層階級の飲食物とされていたビールを愛飲した。そんな国王にふさわしくない行動を知っていたルイは、テニスボールを送ってきたのだ。

さて、こうして両者の意地がぶつかり合ったまま、1415年、ヘンリーは3万の兵を引き連れて海を渡り、ノルマンディーに上陸。激しい戦争の火ぶたが切って落とされた。

戦局は圧倒的にイギリスが優勢。カレーの手前の北東50キロ地点にあるアザンクルの戦闘では、1万人のフランス兵が死亡。これに対して、イギリス側の死者は1500人ほどだった。

それにしても、なぜこれほどヘンリーが圧倒的な勝利をおさめることができたのだろうか。ヘンリーは勇猛な騎士で戦術にもすぐれていた。だが、それ以上に彼に勝利をもたらすことになったのは、ビールだった。

当時、イギリスの庶民は、ホップ抜きのビールの一種であるエールを愛飲していた。また、貧乏な人びとはエールより4分の1も安いビールを飲んでた。いずれにしても、当時のイギリス人はビールが大好き。ビールはある意味で栄養補給剤であり、活力の素だったのだ。

悪い友達と遊びまわって、国民がビール好きなのを熟知していたヘンリーは、アザンクルの戦いの前にビールを大量に調達し、兵士たちに振る舞った。このうれしい差し入れに感激した兵士たちはやる気満々で、フランス軍と戦い、大勝利をおさめることになったのだ。戦いの終わった戦場には、ビールの樽がたくさん残っていたという。

国王らしくない遊びが、思わぬ場面で役に立ったというわけ。「だから、自分も遊びまわっているんだ！」なんて開き直っているのは誰？

## かつて女性のローマ法王がいた？

カトリックの世界で最高の権威を持っているのがローマ法王。歴代のローマ法王はすべて男性というのが世間の常識だが、じつはかつて女性のローマ法王がいたという伝説がある。その女性法王が登場したのは、9世紀のころ。ちょうど9世紀の終わりから11世紀の半ばまでの約150年間は、ローマ法王の地位をめぐる争いが絶えなかった時期である。

そんな混乱の初期に在位したといわれるのが、女性法王ヨハネ8世だ。

1479年にバチカンの司書バルトロメオ・サッチが書いた『法王列伝』では、847年から855年まで法王を務めたレオ4世に代わって法王の座についたヨハネ8世は、男性ではなく女性だったとされている。その記述のもとになったのは、どうやら11世紀の博学者マリアヌス・スコトゥスという人の「レオ4世のあと、ヨハンナという女性が2年5カ月と4日のあいだ法王の座についた」という言葉にあるらしい。

この伝説は、その後、プロテスタントや反教権主義者たちを大いに喜ばせ、芝居などのテーマにもなった。

そこに描かれた女性法王ヨハンナとは、イギリスの聖職者の娘。12歳でドイツの修道院にはいったが、若い修道士と駆け落ちしてギリシアへ行き、男装して学問を学び、やがて出世を重ね、855年にローマ法王に選出されたという。ところが、在位中に女兒を出産したことから女性であることがばれ、馬の尾につながれてローマの外に追放されたとも、お産の後遺症で死んだともいわれている。

この伝説は、16世紀のすえまで何度も取り上げられ、もっともらしいウワサまで流れた。

新しくローマ法王になると、ラテラノ宮殿のチャペルに置かれた底に穴のある椅子に座らされて、性別チェックを受けるというのである。

はたして、真実はどうなのだろうか。

じつはレオ4世のあとに法王の座についたのは、のちに反法王として歴史から消された人物である。また、ヨハネ8世という法王は実在したが、その選出は872年で、敵が多かったために最後は毒殺されたといわれる。もっとも、この法王が女性だったという証拠はなく、ヨハンナの伝説が真実だった可能性は低いようだ。

ところで、こうした伝説が生まれた背景には、15世紀すえに流行した反キリスト伝説が考えられる。また、女性に教会の運営は無理、ということをお納得させるために、デッチあげられたという説もある。いずれにしても、伝説にすぎなかったようである。

## アルマダの海戦でスペインの無敵艦隊が敗れたほんとうの理由

16世紀後半、コロンブスの新大陸発見以来、大西洋の制海権を握っていたスペイン。その艦隊は1000トン級の軍艦を主力に、艦船130、陸兵隊1万5000を含む3万の兵士、砲2000を持つ大艦隊。そのため、人びとからは無敵艦隊と呼ばれていた。

そんな無敵艦隊と真っ向から戦うハメになったのがイギリス海軍だ。当時、自国の海賊に対するスペインからの警告をイギリス政府が無視しただけでなく、スペインから独立しようとしていたオランダを応援する態度に出た。おまけに、両国には宗教上の対立もあったため、緊張状態が高まり、ついに1588年5月9日、フェリペ2世の命を受けたスペイン無敵艦隊が、イギリスに向かって出撃した。この戦いを「アルマダの海戦」という。

もちろん、戦力は圧倒的にスペイン有利。どう考えてもイギリス海軍に勝ち目はなかった。ところが、なんと無敵のはずの艦隊は敗れ、命からがらスペインへ逃げ帰った。130隻あった艦船はわずか60隻に減っていたという。これをきっかけにスペインの国力は凋落し、逆にイギリスの力が隆盛することになったのだ。

いったいなぜ無敵艦隊が敗れたのか。それは、戦術のまずさにあった。無敵艦隊の戦い方は、足の遅い大型のガレー船やガレオン船を主体に敵艦に接近。口径が大きく短射程のカノン砲を撃ってダメージを与えた、敵艦に接舷乗船して白兵戦を展開するというもの。

これに対して、イギリス艦隊は小型だが快速のカラベラ船が主力で、カルバリン砲を遠くから撃って、相手の接近を許さないという戦法。カルバリン砲はカノン砲に比べて口径が小さくて破壊力も小さいが、カノン砲よりも500メートルも遠くまで砲弾を飛ばすことができたのだ。

つまり、大型で小回りのきかない無敵艦隊が、機動力抜群のイギリス艦隊に敗れたというわけ。まさに「柔よく剛を制す」の精神といえるかも。

## 17世紀のバブル・オランダのチューリップ投機はなぜ起こった？

投機によって生まれる、実態経済とかけはなれた相場や景気をバブル経済という。これに浮かれた反動で痛い目にあっているのが現在の日本。1986年ごろから始まったバブル経済が1991年ごろに終わり、長い不景気のトンネルに突入した。

歴史は繰り返される。じつは、過去の歴史においても、同じようにバブル経済に浮かれた国があった。それは、1634年ごろのオランダである。しかし、そのときの投機の対象となったのは、なんと株ならぬチューリップ。球根ひとつに平均的な労働者の賃金10年分もの高値がついたり、数週間で3倍にまで値上がりしたというのだ。

人びとはわれもわれもとチューリップの球根の投機に加わるようになり、お金のない人も代わりに物で支払って参加するほどだった。ある農民は、最高級の球根1個を手に入れるために、小麦4トン、ライ麦8トン、肥った雄牛4頭、ブタ8頭、ヒツジ12頭、バター4トン、チーズ1000ポンド、雄牛の頭2つ分のぶどう酒、ベッド1台、銀のピーカーを支払ったという。なんとも常識外れの買い物で、「嵐の取引」とも呼ばれた。

それにしても、なぜチューリップが投機の対象になったのだろうか。

その最大の要因は、チューリップが上等な花とされ、世界じゅうでブームとなったためだ。

球根の売買といっても、実際に球根を売り買いするわけではなく、球根を何年何月何日に入手できるという契約書を買収し、その差額で儲ける先物取引。品種に格付けが行なわれ、栽培業者はより変わった品種を求めて改良を重ね、バイヤーはそれに法外な値をつけた。商品の差別化がしやすく、価値がはつきりしていたため、投機の対象となりやすかったのだ。

また、このバブルを支えたのはオランダ人の国民性。一般的にオランダ人はケチといわれるほど質素でマジメ。それは、経済的な価値を重要視して、しっかりお金を貯めるということでもある。だから、うまい儲け話があれば、ついつい飛びついてしまったというわけだ。

しかし、儲かるためにはつねに値段が上がりつづければならぬ。だがもちろんそんなことは不可能で、やがてバブルがハジけるのは世の常。オランダのチューリップ投機も、1637年に価格が暴落。そのダメージは長く国民の記憶に残ったらしく、約80年後にヨーロッパに投機の波が訪れたときには、オランダ人だけは慎重になったという。

## 被告はなんとウマ、ブタ、ハチ？ 大まじめに行なわれた「動物裁判」

「クマさんがキツネさんを殴ったのは傷害罪に該当します！」

おとぎ話ではない。動物が裁判の被告になるというウソのようなホントの話がかつてあった。ヨーロッパでは、動物を被告にした「動物裁判」が実際に行なわれていたのだ。

被告になった動物はさまざま。1639年、フランスのディジョンでウマに死刑が宣告された。理由は乗っていた人間を振り落として死なせたから。また、1471年にはスイスのバーゼルでオンドリが処刑された。オンドリのくせにどういうわけが卵を産んだ。それは自然の法則に逆らう行為だと、「変装した悪魔」として薪の山の上で焼かれた。

ブタに対しても容赦はない。1394年、ノルマンディーで雌ブタが人間の子どもを食べた罪で絞首刑に処せられた。また、1864年に1歳の女の子の耳をかみちぎったブタが裁判にかけられ、判決によって体は細切りにされてイヌに与えられ、そのブタの飼い主は女の子に結婚時の持参金を与える約束をさせられたという。

さらに、北イタリアでは畑を荒らしたモグラが裁判にかけられたが、被告が出廷に応じないため（そんなことできるはずがない！）、欠席裁判で追放処分に。だが、妊娠している母モグラか子モグラに対しては、猶予期間を与える「温情判決」が出たのだ。

動物ばかりか虫だって刑事責任を問われた。1864年、ドイツのウォルムスの帝国議会で、ひとりの男を刺し殺したハチの群れが裁判にかけられ、窒息刑が宣告された。また、1659年には、他人の土地に無断で侵入して、故意に害を与えたという理由で、イモムシが告発された。さらに、ブラジルでは修道士たちの食べ物を食べたり、家具をかじるという理由でシロアリが被告になっている。

こうして被告になったのは、毛虫、ハエ、イナゴ、カタツムリ、ナメクジ、ヒル、ネズミ、モグラ、ハト、ブタ、ウシ、オンドリ、ウマ、イヌ、ロバ、ヤギなど。これだけで動物園ができそうぐらい、ありとあらゆる生き物が裁判にかけられている。判決はやはり死刑が多く、生きながら焼かれたり、生き埋めにされる残酷なケースもあったようだ。

いまから見れば、なんだかバカバカしい話だが、当時の人びとにとっては真剣。だから、動物裁判は人間同様に正規の手続きで行なわれた。そのため、動物の弁護をして有名になる弁護士も現われたのだ。

動物にとっては迷惑に思えるが、いまは悪事を働けばいきなり殺されることもある。もしかしたら、昔のほうが裁判があるだけまだマシかも？

## 史上最大のバーゲン！ ニューヨークの値段はなんと40ドル！

世界の超大国アメリカ。そのなかでも最大の都市がニューヨークだ。ハドソン河口に位置し、世界経済上の大中心地で、世界貿易センタービルやエンパイアステートビル、国連本部ビルなどたくさんの摩天楼がそびえる。

そんなニューヨークのマンハッタンは、ハドソン河口にある細長い形の島で、もとは樹木に覆われ、ごくわずかなアメリカ先住民が住むだけだった。何度かオランダ船がこの川を探検して、沿岸に住む先住民に酒を振る舞ったり、毛皮などの取引をして友好関係を保ったという。

ところが、そんなマンハッタン島に大変化が訪れる。1626年にオランダ西インド会社が物々交換で、インディアンからこの島を購入したのだ。値段はなんとアルコール類や日用品などわずか60ギルダー程度。現在の価格で40ドルぐらいという破格の安さだった。

いくら物価の安い時代とはいえ、この安さは半端ではない。このため、のちにこの取引は「史上最大のバーゲン」と呼ばれるようになった。

オランダ人たちは購入したマンハッタン島の南端に、小さな植民地をつくり、母国にちなんでニューアムステルダムと呼んだ。この町を中心に川沿いに点在するオランダ領の植民地が発展したのだ。

ところが、1664年夏、ニューアムステルダムは名まえを変える。イギリス国王の弟ヨーク公の命を受けて現われた4隻のフリゲート船隊に対して、当時の総督は徹底抗戦を呼びかけた。ところが町の人びとはあっさりと降伏。これによって、ニューアムステルダムはイギリス領になり、名まえもニューヨークになったわけだ。

それから独立宣言が出されるまで、独立戦争の戦闘の3分の1はニューヨークが舞台だったといわれるほどにイギリス領として発展する。当時のマンハッタン島の人口は約8000人で、オランダ人とイギリス人のほかにフラン



ス、ドイツ、フィンランド、スウェーデン、ユダヤ系、アンゴラからの黒人奴隷など。「人種のるつぼ」といわれる現代のニューヨークの特徴が、早くも顔を出していたわけだ。

それにしても、「史上最大のバーゲン」で購入した島が世界の大都市になるとは、売ったほうはもちろん、買ったほうだって予想しなかったにちがいない。オランダにとってはじつにオイシイ話だったが、結局、イギリスに奪われてしまったのだから元も子もない。

あまりにも安い価格で手に入れた天罰が下ったのかも？

## マリー・アントワネットにプロポーズしたモーツァルト？

子どものときの約束などアテにはならないが、もしもそれが実現していたらどうなっていたらと思うのは、なかなか楽しい行為ではある。

フランス王ルイ16世の王妃で、フランス革命の際、ギロチンで処刑されたことで知られるマリー・アントワネット。その波乱に富んだ生涯は、映画や舞台などでもしばしば取り上げられているが、そんな彼女の幼少期のエピソードを紹介しよう。

マリア・テレジアと神聖ローマ皇帝フランツ1世の末娘として生まれたマリー・アントワネットは、15歳までをウィーンから西南に5キロほどにあるシェーンブルン宮で過ごした。彼女の部屋は「マリー・アントワネットの部屋」としていまも保存され、壁には彼女の肖像画がかけられている。

1762年10月13日、そのシェーンブルン宮で、あるイベントが開かれた。当時神童として話題になっていた、のちの作曲家モーツァルトのピアノ演奏会だ。このとき彼はまだ6歳。だが、さすがに神童の名にふさわしく、彼は大人も顔負けの名演奏を披露した。

マリア・テレジアやフランツ1世をはじめ、宮廷の人びとは賞賛の拍手を送った。

そのモーツァルトが、うっかりすべて転んでしまった。なにしろ宮廷の床はピカピカに磨き上げられていて、大人だって油断すれば足を取られそうだった。

ステンと転んだモーツァルト。そこに駆け寄ったのはかわいい少女。幼い日のマリー・アントワネットだ。彼女は優しくモーツァルトに手を差し伸べた。モーツァルトは恥ずかしさで顔を赤らめながらこういった。

「ありがとう。大きくなったらお嫁さんにしてあげるね」

周囲の大人たちは大爆笑。マリーの母親マリア・テレジアが「どうしてこの子をお嫁さんにするの？」と聞くと、モーツァルトは「だって、とても優しいんですもの」と答えたという。父に厳しくピアノを教え込まれ、演奏旅行をつづけていただけに、少女の優しさが心に深く染み込んだのかもしれない。

もちろんこれはたわいもない子どもどうしの会話で、深い意味があるわけではない。だが、その後波乱の生涯を送り、歴史に名を残したふたりが、幼いころにこんな形で出会っていたというのは、なんともおもしろい。

若くして謎の死を遂げたモーツァルト。フランス革命で処刑台の露と消えたマリー・アントワネット。もしも、このふたりがほんとうに結婚していたら……。

## フランス革命の始まり「バスティーユ監獄襲撃」はなんのため？

1789年に起きたフランス革命のきっかけになったのが、7月14日のバスティーユ監獄の襲撃事件。収容されている政治犯を解放するために、民衆が監獄を襲撃した事件だ。

バスティーユ監獄は、パリ東部サンタントワヌ郊外にあった、百年戦争のときにバリ防衛のために築造された城塞のひとつで、のちに、ルイ13世の命により獄合に改造されたもの。当時の反政府的な文筆家らが投獄され、専制政治の象徴と目されていた。

ところが、実際にはなんと7人の囚人しかいなかった。しかも、それは手形偽造犯や精神に異常がある人などばかりで、ひとりの政治犯も含まれていなかったのである。

監獄を襲撃するという大胆な行動に出るのだから、それなりの計画があったはずである。

当然、その中にはかなりの数の政治犯が収容されているべきだが、バスティーユに政治犯がいなかったということ

は、この事件の真の目的は政治犯の解放ではなかったのではないか、という説が登場している。

当時、多くの民衆が専制政治に反対していたが、それを警戒して市民を威嚇していた国軍に対して、ほとんどの民衆はなんの武器も持っていなかった。そのため、パリの中でも多数の武器が保管されていると考えられる廃兵院とバステュー監獄を襲撃して、武器を入手するのが目的だったというのだ。

事件当日、民衆はまず廃兵院を襲って武器を手にした。だが、小銃は手に入れたものの、火薬は安全のためにすでにバステューに移されていた。そこで、今度はバステュー監獄を襲撃して、武器に加えて火薬も手に入れることができたのだ。

また、監獄は国王の圧制のシンボルであるだけに、これを襲撃することは絶好のPRにもなる。さらに監獄を襲撃した人びとは、監獄の塔の上から民衆を威圧していた大砲も撤去させたというわけ。

さて、こうして民衆は革命に向かっていっきにパワーを結集させた。これに刺激されて、憲法制定国民議会は、封建的諸権利の廃止や「人権宣言」の採択などを行なった。だが、それでも国王はあまり心配しておらず、いつでも武力で弾圧できると考えていた。そして、軍をベルサイユに集結させるなどして民衆を威嚇。ところが、これが逆効果で、さらに民衆の反発を呼んでしまう。

慌てた国王は国外への逃亡を企てるものの、民衆に発見されてパリに連れ戻され、これによって国王の権威は完全に失墜してしまうのだ。

### ワシントンの有名な桜の木の逸話はウソだった？

アメリカ合衆国建国の父といわれる初代大統領ジョージ・ワシントンといえば、幼少時の桜の木のエピソードがあまりにも有名だ。

父親から斧を贈られたワシントンはうれしくなり、いろいろなもので試してみた。父のたいせつにしている桜の木でも試してみたところ、深い傷がついてしまった。翌朝、父親がそれを発見して、家の者たちに尋ねてみるが、誰も心当たりがないという。そこへ斧を手にしたワシントンが現われて、自分の犯行であることを父親に告白。すると、父親は息子の正直さを喜んで「お前のその正直な答えは、桜の木1000本よりも価値があるものだ」と抱きはじめた。だから、人間は正直でなくてはいけないという教訓を込めた話だ。

だが、じつはこの話が作り話だった可能性があるのだ。話を作ったのは、アメリカの英雄たちの伝記を書いてひと儲けしようと考えたロック・ウィームズという名の牧師。彼は、1800年にワシントンの逸話を集めた『逸話で綴るワシントンの生涯』という本を書き上げた。この本はなかなか好評で、ウィームズが死ぬまでに21版を重ねるヒットになったという。

ただし、桜の木のエピソードは最初から登場していたわけではない。第5版に初めて登場している。つまり、あとから付け加えたものののだ。りっぱな婦人から聞いた話で、真実であることは疑いの余地がない、と書かれているのもなんとなくあやしく思える。

このほかにも、彼は、ワシントンの若いころの貧乏を強調するようなエピソードなど、たくさんの逸話を作っている。それによって、ヒーローとしてのワシントン像を確立し、さらに本を売ろうと考えたわけだ。

ただし、だからといって、ワシントンがほんとうはウソつきだったということではない。

彼はたしかに正直な人間だったといわれている。できるだけウソをつかないことをモットーにしていたのも事実。だが、同時に彼は紳士的な人物で、つねに相手を傷つけないように心がけていた。そのため相手によって表現を変え、結果的にウソをついてしまうこともあったようだ。また、政治家として戦争の報告を脚色することもあったという。

つまり、桜の木のエピソードは、それなりに正直だったワシントンを「正直の神様」にまで祭り上げてしまったというわけ。しかも、それはひと儲けしようと思った他人の仕業で、桜の木の話が作り話だからといって、ワシントン自身にはなんの罪もないことなのである。

### 進化論を唱えたのはダーウィンだけじゃない？

進化論は、生物のそれぞれの種は神によって個々に創造されたものでなく、簡単な原始生物から進化してきたものであるという説。1859年に、ダーウィンが体系づけたことによって広く社会の注目を集めるようになった。そのため、進化論を唱えたのはチャールス・ロバート・ダーウィンだというのが世界の常識になっている。ところが、実はダーウィンと同時期に進化論を唱えたもうひとりの人物がいたのだ。

その人物とはイギリスの博物学者のアルフレッド・ラッセル・ウォーレス。動物地理学に興味を持った彼は、東南アジアにおける独自の野外調査をもとにダーウィンと同じように種の起源と自然選択説に到達する。それは発想のヒントになった観察結果や影響を受けた本までほとんど同じという、まさに偶然の一致だった。しかも、彼はダーウィンの説の一部について、その誤りを指摘するほど鋭い分析をしていた。

彼はさっそくインドネシアのモルッカ諸島にいるダーウィンに自説を書いた論文を送った。そのころ、すでにダーウィンも進化論に到達していたが、それをさらに確かなものにするために、まだ本格的な論文の発表は差し控えていた。そこに自分と同じ説が書かれた論文が届いたのだ。

驚いたダーウィンは、地質学者ライエル、植物学者フッカーらに相談。その結果、ダーウィンの説の要約と、ウォーレスの論文をいっしょに学会に提出することを提案され、ふたり同時に同じ内容の論文が発表された。

こうした経過を見れば、ウォーレスの名まえもダーウィンと同じように有名になって当然だ。だが、そうはならなかった。

なぜかといえば、ウォーレスはダーウィンを心から尊敬。「証拠の膨大な蓄積、圧倒するような議論、そして感嘆すべき論調と精神」において、自分はとても彼にかなわないと感じていた。そのため、強力に自己主張することもなく、ダーウィンに手柄を譲り、進化論を「ダーウィニズム」と呼ぶことを許したのだ。

こうしたケースは学問の世界ではめったにない。すこしでも自分の学説を売り込もうと考えるのが当たり前。ときには不正な方法で他人の業績を奪ってしまう人さえいる。そんななかで、ウォーレスのような人物は貴重な存在といえる。金銭にも淡泊で、調査対象の東南アジアの現地人に対しても、すこしも偏見をもたなかったという。進化論では知られていなくても、動物の地理的分布を調べ、ウォーレス線にその名を残している。

## なんとアメリカに皇帝が即位していた時代があった？

アメリカの最高権力者はもちろん大統領。若い国だけに、ヨーロッパの国々のように君主が存在したことなどない、と思ったら大間違い。じつはなんとアメリカにも君主が君臨していた時代があるのだ。

1859年9月17日付の『サンフランシスコ・プレティン』紙上に次のような勅令が布告された。「合衆国市民の大多数の絶対的な要請と希望により、朕、ジョシュア・A・ノートンは、自ら合衆国皇帝を名乗り、その即位を宣言する」

このジョシュア・エイブラハム・ノートンというイギリス系ユダヤ人こそがアメリカ合衆国皇帝。彼は1859年から1880年まで皇帝の座についていた。

ノートンは1815年にロンドンで生まれた。その後、カリフォルニアのゴールドラッシュに乗じて大儲けしたものの、結局は破産。みずばらしい下宿暮らしを始めるようになった。そのころから「自分はカリフォルニア皇帝ノートン1世だ!」と主張。やがて、カリフォルニアは小さすぎて自分にふさわしくないと判断して、1859年にアメリカを「併合」し、合衆国皇帝になったのである。

やがて、皇帝を名乗るこの変わったホームレスは、街の有名人になってしまった。皇帝になった彼は、憲法を一時停止。共和党と民主党を解散させ、独自に紙幣を印刷した。また、ボルネオの野人をお供に街のパトロールを欠かさなかったという。もちろん、彼が勝手に行動していただけで、国民がそれに従ったわけではないが、それでも人びとは彼を邪魔者扱いすることもなく、温かく見守りつづけた。

そして、1880年に彼が亡くなると、大勢の人びとが葬儀場に押しかけ、新聞は「国王はお亡くなりになった」というウィットに富んだ見出しで打っているのだ。

## 童話作家アンデルセンが文通していた「小さなお友だち」とは？



童話作家として有名なアンデルセンが64歳のときのこと。イギリスの6歳の少女から一通のファンレターが届いた。

「私はあなたの童話が大好きです……パパがアフリカから帰ってきたらあなたに会いに連れていってと頼みます」  
喜んだアンデルセンは、「私のかわいい、小さなお友だち」と返事を出した。少女の「もっともっと書いてください」という手紙に大いに励まされたのである。ふたりはそれから5年以上も文通をつづけ、アンデルセンは彼女からの手紙をいつも持ち歩き、自作の英訳本を贈ったり、お互いに写真を交換したりしたという。

この少女の名はメアリー・リビングストン。あの有名な探検家、リビングストンの娘である。キリスト教の伝道者で医師でもあった彼女の父は、当時のヨーロッパ人にとっては未知の大陸だったアフリカでさまざまな部族とともに生活し、キリスト教を布教しながら、カラハリ砂漠、ザンベジ川などをつぎつぎに踏破。アフリカ大陸の横断にも成功したのである。

ところが、ナイル川の水源を探る探検の途中で行方不明になり、やがて人びとは彼が死んだと噂するようになった。

そんななか、ある新聞社の社長の命令で、スタンリーという若い新聞記者がリビングストンを探しに出かけ、1871年についに彼を発見したという話は有名である。

しかし、帰国のめをふりきって、アフリカに残ったリビングストンは翌年亡くなり、ふたたび娘に会うことはなかった。そのため、アンデルセンに会いたいというメアリーの願いは、かなえられることがなかったのである。

ちなみに、新聞記者スタンリーは、のちにリビングストンの遺志を継ぎ、探検家として有名になった。

## 第一次世界大戦が起こったのは、車で道を間違えたから？

1914年7月に、オーストリアがセルビアに宣戦したことから始まった第一次世界大戦。その宣戦のきっかけは、ちょっとした間違いから起きた。

1914年6月28日、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナントは、妻とともに車に乗りサラエボの通りをパレードしていた。サラエボはもともとセルビア領だと考えられてきたが、1908年にオーストリア・ハンガリー帝国がボスニア・ヘルツェゴビナを併合した際に、隣接するサラエボも併合。そのため、オーストリア・ハンガリー帝国に対する反発が強まっていた。皇太子は、自分が訪問すれば、その反発がすこしはやわらぐかもしれないと考えたのだ。

だが、事態は皇太子の思いどおりには進まなかった。パレードの途中、群集に紛れ込んだセルビアの青年がピストルを発砲。弾丸は皇太子の腹を貫き、命を奪った。これが有名な「サラエボ事件」である。この事件の1カ月後、オーストリアはセルビアに宣戦。続いて各国が相次いで参戦し、第一次世界大戦が始まったのである。

じつは、この事件の陰には意外な事実があった。

暗殺事件が起きるすこし前に、パレードに向かって爆弾が投げられ、何人かの見物人がケガをするという事件が起きていた。このため、狭くて人通りの多いフランツ・ヨーゼフ通りを通るのは危険すぎると判断し、皇太子は予定されていた美術館行きを中止し、その代わりに、ミリャツカ川に沿った広いアピル・クエイ通りをまっすぐに引き返すことになっていた。

ところが、このルート変更が運転手たちには伝えられておらず、最初の車は予定どおりフランツ・ヨーゼフ通りに右折。皇太子の乗った車もそれに続こうとしたが、間違いに気づいた護衛が慌てて引き返すように命令。運転手はもとの道に向かって車をバックさせることにした。狙撃事件が起きたのは、ちょうどその瞬間。犯人の青年は最初から皇太子を狙っていたものの、なかなかうまくいかずに、たまたまその交差点に立っていてチャンスをつかんだのだ。

もしも、運転手がコース変更を知っていて、そのまま直進していたら、この事件は起きなかったかもしれない。

もちろん、当時の世界状況から考えて、この事件がなくても第一次世界大戦が起きた可能性は強いが、それでも、偶然的の怖さを思い知らされる出来事だった。

## オーストリア皇太子が心中相手に選んだ女性は別人だった？

オーストリアのハプスブルク家は呪われた王家といわれている。エリザベート・フランツ・フェルディナントと相次いで他国で暗殺され、おまけに皇太子による心中事件まで起きたためだ。

心中事件の主人公は、フランツ・ヨーゼフ皇帝とエリザベート王妃の嫡子、皇太子ルドルフ。心中相手は男爵の娘マリーだ。ふたりはウィーン郊外のマイヤリンクの狩り小屋でピストル心中を遂げた。その原因については、報われぬ恋に悩んだすえとか、別れ話のもつれだとかのウワサが流れたが、あまりにもナゾが多い事件であるため、実は皇太子は暗殺されたのではないかという説まで登場している。

だが、この事件の陰にはマリーのほかにもうひとりの女性がいた。「ソプラノ歌手」とも「踊り子」だったともいわれるミッツィ・カスバルという美しい黒髪の女性である。あるとき、彼女に出会った皇太子はひとめぼれ。それから高価な装身具や館までプレゼントするといういれ込みようで、ひたすら彼女のもとに入り浸るようになったのだ。当時、皇太子にはすでに妻がいたが、政略結婚だったためにその存在を苦痛に感じていたという事情も、その背景にあったらしい。

ミッツィとつきあううちに、皇太子は自堕落になり、「政治なんかどうでもいい。従兄弟があとを継げばいい」とまでいうようになった。そして、心中事件の半年ほど前には、教会の前でいっしょに撃ち合って死ぬことを彼女に提案した。だが、ミッツィはこれに驚いてウィーンの警察長官に通報。そのため、皇太子のプランは実現しなかった。もしも、このときにミッツィが皇太子の提案に応じていれば、心中相手は彼女になっていたわけだ。

それから約半年後、皇太子はミッツィの家から心中現場のマイヤリンクに向かった。別れ際には彼女の額に十字の印を切ったという。

それにしても、なぜ皇太子は心中相手をミッツィからマリーに切り替えたのか。たしかに、皇太子はマリーとも交際があったが、心中当時はすでにふたりの関係は冷め切っていたという。もしかしたら、皇太子にとって相手は誰でもよくて、ただ死にたかっただけなのかもしれない。実際、彼はミッツィに心中を持ちかけた際に「自分が自殺するのは名誉のためだ」と話している。

とにかくナゾの多いこの事件は、1969年にはフランス映画『うたかたの恋』に描かれるなど、世界中でセンセーショナルな話題を巻き起こしたのである。

---

## 世界史 20世紀の謎② 帰国後、別人になりすましたアラビアのロレンス

映画でもおなじみの『アラビアのロレンス』ことトマス・エドワード・ロレンスは、1888年生まれのアングロ・イスラエル系イギリス人である。大学で考古学を学び、古代トルコ遺跡発掘隊に参加するなどした中東体験を買われ、第一次大戦中、陸軍情報将校としてカイロに派遣された。ドイツ側に参戦したトルコの後方をかく乱するため、彼はトルコの支配下にあったアラブ民族の独立運動を指導した。

彼の活躍ぶりを取材したアメリカ従軍記者によって、彼はたちまち英雄として名を残すことになった。

だが、彼自身はそんな名声に対して複雑な気持ちだったようで、中東を離れて帰国してからは、変名を使って一兵卒として勤務。1935年に除隊したあと、オートバイ事故で死んでしまった。

彼についてはアラブ独立に賭けた理想主義者という評価がある一方で、イギリスの権力主義的な政策を忠実に遂行した人物と見る人もいるなど、いまでもその評価は分かれている。

## あの有名な人物の知られざる裏話

### 哲学だけでは食っていけない？ じり貧だった哲学者ソクラテス

人類にとっていくら役に立つ仕事をしたとしても、それが実益に結びつくとはかぎらない。せっかく素晴らしい業績を残しても、貧困生活を送る人も珍しくはないのだ。

古代ギリシアの大哲学者ソクラテス（前470～前399年）は、対話的問答を通じて相手にその無知を自覚させ、相携えて真の認識に到達しようと努めた。その思想は現代でも高く評価されているが、そんな彼も生活はけっして楽ではなかった。

当時のローマ社会は農業が経済の基本で、いちばんまとめた職業だった。学者になるということは、その道から外れるということ。ソクラテス、プラトン、アリストテレスといった有名な哲学者たちは、哲学でお金を稼ぐことはできなかった。哲学を教えて授業料を徴収することはなかなか難しかったのだ。

ソクラテスも弟子たちに一度も授業料を要求しなかったが、かといって、彼は副業を持つでもなく、哲学に没頭して暮らした。だから、いつも貧乏だった。彼の父ソフロニコスは石屋か彫刻家で、ある程度の資産があったといわれる。また、弟子たちが授業料の代わりに金品の贈り物をすることもあり、そうしたわずかなお金で生活していたようなのだ。

世に悪妻といわれる妻のクサンチッペが口うるさかったのも、そのためだったのかも？

これに対して、プラトン（前428～前348年）はアテナイの名門の生まれ、かなりの財産家であったようだ。しかし、ペロポネソス戦争で損害を受けて貧乏になったという説もある。だが、果樹栽培の副業を持っていた、ふだんの生活費には困らなかったようだ。

また、アリストテレス（前384～前322年）の父はマケドニアエの侍医。かなりの資産家であったようだ。旅先で、有名なアレクサンドロス大王の家庭教師を務めたので、資金の援助を受け、それで学園を開いたという説もある。

### 敵にも惜しまれた？ アルキメデスの死

お湯をいっぱい張ったお風呂にはいると、その分お湯があふれる。つまり、固体の全部または一部を流体中に浸すと、それが排除した流体の重さに等しいだけの浮力を受ける。

これを「アルキメデスの原理」という。

この原理の発見者は古代ギリシアの数学者で物理学者のアルキメデス（前287年ごろ～前212年）。円・球・楕円・放物線および、それらの回転体の求積法、でこの原理など数多くの発見をした偉大な学者だ。そんな彼の偉大さを示すエピソードがある。

あるとき、ローマの名将マルセスが大軍を率いて海上からシラクサ市に攻撃を仕掛けてきた。だが、この戦いはローマ軍対シラクサ軍というよりも、「ローマ軍対アルキメデスの頭脳」の対決だった。

なぜなら、ローマの軍艦に大きなダメージを与えたのはアルキメデスが発明した武器。

城壁の上に据えつけられたカタルバルトという機械から突然、雨あられと大きな石の塊が発射され、ローマ軍艦の多くが破壊され、沈められてしまった。また、巨大な起重機が突き出され、ローマの艦船を軽々と空中へ持ち上げて海面に投げ落として沈めた。さらに、城壁に仕掛けられた巨大な凹面鏡に太陽光線が反射。それによって発生する強烈な光線と熱がローマ艦船を苦しめた。これらはすべてアルキメデスが発明した武器。彼は武器開発者としてもすぐれた能力を持っていたわけだ。

ところが、そんなアルキメデスにも最期の時が来る。さんざんシラクサ軍に苦しめられたローマ軍だが、いよいよ最後の総攻撃を開始。ローマ軍の兵士たちはシラクサに攻め込み、アルキメデスの自宅にもある無名の兵士が攻め込んできた。ちょうど庭にしゃがみ込んで、砂の上に図形を書いてじっと見つめていたアルキメデスを見たローマ兵

は、遠慮なくズカズカと近づいてきた。すると、アルキメデスは、「私の円を乱すな!」と一喝した。

そして、ローマ兵に切り殺されてしまったのだ。

それからしばらくして、シラクサを占領したローマ軍のマルセス將軍は、部下の兵士がアルキメデスを殺していたことを知って大ショックを受ける。じつは戦いの前に彼は、「アルキメデスは敵ながら、かけがえのない偉大な人物。殺すことは絶対に許さない。安全に保護しろ」と強く命令していたのだ。怒った將軍は、アルキメデスを殺害した兵士を直ちに処刑したという。

敵からも惜まれたアルキメデスの死。さすがに偉大な学者だけのことはある。

## ヴェスビオス火山の噴火を書きとめた博物学者プリニウスの好奇心

野次馬根性は誰にでもある。だが、それがエスカレートするみたいへんことになる。

古代ローマの軍人で、博物学者でもあるプリニウス（紀元23～79）は、若いころに文学、法律、雄弁術などを学び、その後、各地に出かけて、その地の物理学や地理学、植物学、解剖学などを細かく記録した。彼の業績のうち37巻の『博物誌』はいまも残っていて、当時のローマ人の知識やものの考え方などを知る貴重な資料になっている。

こうした仕事をしていただけに、彼の好奇心はとても強かったようだ。そして、その好奇心が、彼にとっては仇になってしまったようなのである。自らの命を縮めてしまう結果となった。

紀元79年8月、ローマ海軍の提督だったプリニウスは、艦隊とともにナポリ湾の北端に駐屯していた。ある日の午後、彼がいつものように本を読んでいると、彼の姉妹が「近くの山から大きな煙が立ち昇っている」と知らせてきた。よく見ると、たしかに黒い煙がモクモクと湧き出ている。どうやら、噴火しているようだった。だが、詳しいことはよくわからない。

そこで、プリニウスの持ち前の好奇心がムクムクと頭をもたげた。

「なんとか、あの煙の正体を突きとめたい。よし、あの煙のほうに近づいてみよう」

そう思ったプリニウスは艦を召集し、煙のほうにどんどん近づいた。山からは石が降り注ぎ、地元の住民は必死で逃げ出していた。

それでも、彼はすこしもひるまず、山に向かっていった。翌朝には、湾岸一帯に有毒なガス雲が漂い、空は夜のようになっ黒になった。もうこれでは先へ進めない。とうとう仲間たちはみんな引き返してしまった。

しかし、プリニウスは火山に向かいつづけた。ここまでくると、もうただの好奇心というレベルを超越して、一種の執念のようなものである。

翌日になって、海岸で倒れていた彼の遺体が発見された。死因は窒息死。噴煙に巻かれて死んだのだろう。

このときの噴火こそが、ポンペイの街を埋め尽くし、何千人もの死者を出した歴史に残るヴェスビオス火山の噴火である。プリニウスは人命救助の目的もあつて火山に近づいたともいわれるが、おそらく、それ以上に強かった彼の好奇心のおかげで、後世、われわれは、この火山の噴火の様子も知ることができるのだ。

## 楊貴妃はほんとうに美しかったのか？

唐の玄宗の寵愛を一身に受けたのが、美人として名高い楊貴妃。

楊貴妃はもともと玄宗の子・李瑀の妃だった。しかし、玄宗の妃が亡くなると、玄宗は彼女を後宮から出し、いったん道教の寺に入れ女道士にしたうえで、宮廷に呼び寄せている。そして、皇帝夫人に次ぐ地位の貴妃の称号を与えている。つまり、玄宗が小細工して、息子の嫁を自分のものにしてしまったというわけだ。

一身に寵愛を受けたなどというと、色気だけで勝負していた印象があるが、楊貴妃の場合には芸術的なセンスにも優れていた。音楽を得意として楽器であればなんでもこなし、舞踏においては蝶が飛ぶように軽やかに舞ったといわれている。そうした芸術的なセンスが、玄宗の好みとピッタリ合ったようだ。

もちろん、彼女が美人であつたことは間違いない。その美しさに玄宗は大喜び。ふけ込みはじめていた彼がいつきに若返ってしまったのだ。

だが、はたしてほんとうに彼女は美しかったのだろうか。楊貴妃を描いた絵を見ると、二重アゴになっていたりしてかなり太め。現代的感覚では、美人という感じではない。

美人の価値観というのは、その時代によって大きく変わるもの。太めがもてはやされるときもあれば、細身が美人の条件だとされるときもある。それほど美人の基準は時代によって変化する。現代の感覚では、とても美人とは思えない楊貴妃も、当時としてはまさに絶世の美女だったわけだ。

さて、そんな楊貴妃と玄宗のロマンスにも終わりが訪れる。楊貴妃自身は政治に口出ししなかったものの、どんどん出世していった彼女の一族が権勢を誇るようになった。それに反発する人びとが安史の乱（755～763年）を起し、玄宗とともに逃走した楊氏一族は殺されてしまう。楊貴妃も756年、馬嵬駅で高力士によって絞め殺されてしまうのだ。享年38歳だった。

玄宗は、翌年、楊貴妃の遺体をきちんと埋葬し直したといわれているが、その所在地は不明だ。

楊貴妃と玄宗のロマンスについては、詩人・白居易の『長恨歌』に描かれている。ふたりの出会い、結ばれてから、安史の乱、楊貴妃の死、その後の玄宗の心情などが、華麗に描かれていて、日本でも平安朝の貴族のあいだで親しまれた。

### 気に入らなければ離婚か処刑？ ヘンリー8世の結婚裏話

かつての専制君主には横暴な人がたくさんいた。1509年に即位したイギリス王ヘンリー8世もかなり横暴な人物だった。その犠牲になったのが彼女の妻たちだ。

彼の最初の妻はキャサリン。スペインのイサベル女王の娘で、ヘンリーの兄アーサーの妻になったが、1年もしないうちに彼が死んだためにヘンリーの妻となった。キャサリンは7回身ごもったが、そのうち育ったのはメアリひとり。男の子は生まれなかった。ヘンリーはこれを旧約聖書にある兄嫁との結婚の戒めにそむいたためだと考えて、彼女を遠ざけ、愛人の女官アン・ブーリンとの結婚を望むようになった。

ローマ教皇はヘンリーの離婚を禁じたが、彼はこれを見做す。アンと再婚した。教皇はヘンリーを破門し、これをきっかけに両者の対立は激化。ヘンリーは自分がイギリス教会の地上における唯一最高の首長であるとする「首長令」を出す。これを認めなかった大法官トマス・モアが処刑されるという事件まで起きた。

そうまでして実現したアンとの結婚だが、ヘンリーが望む男児の誕生はなく、生まれたのは女兒エリザベスのみ。ヘンリーはこれにがっかりして、3年後にはアンを姦通と近親相姦を犯したという大逆罪で告発し、処刑するという暴挙に出た。彼女の相手をしたとされる男たちも同時に処刑。なんとも自分勝手な夫である。

さて、その次に妻になったのはジェーン・シーモア。アンの処刑後わずか10日後の結婚だった。彼女は待望の男児エドワードを産むが、出産直後に亡くなってしまった。

その後、ヘンリーは49歳のときに、18歳のキャサリン・ハワードと結婚。ところが、これまた1年足らずで姦通罪で処刑。

こうして妻をことごとく離婚したり、処刑してしまった横暴なヘンリー8世だが、最後に妻になったキャサリン・パーだけはどうか難を逃れることができた。なぜなら、ヘンリーが先に死んでしまったからだ。もしかしたら、歴代の妻たちの恨みがヘンリーを殺したのかも？

妻たちにとってはまさにとんでもない夫だったヘンリー8世だが、イギリスの歴史の上では大きな役割を果たしている。みずからの離婚問題をきっかけに、首長令を出してローマ教会から分離し、修道院を解散させ、その土地・財産を国有化した。イギリス国教会を成立させたことが、イギリスの国家統一、ひいては、絶対王制の確立に大きく貢献することになったのだ。

### トマス・モアが描いた『ユートピア』の華麗なる世界

現代社会に矛盾や不正があればあるほど、理想社会を夢見る気持ちは強くなる。

イギリスの政治家で思想家のトマス・モアも、王権と教権から自由な理想社会を強く夢見た。理想社会のことを「ユートピア」というが、それは彼の造語。「どこにも・ない」（ウ・トボス）という二つのギリシア語を組み合わ



せてつくったものだ。

1516年、大航海時代のイギリスで、モアは一冊の架空物語をラテン語で著わした。

それは、『社会の最善の政体とユートピア新島についての楽しいと同じほどに有益な黄金の小著』という、ずいぶん長いタイトルのもの。

この中で、彼が描いた「ユートピア新島」は、四方を海で囲まれた新月のような形の大洋上の孤島。かつては大陸と地続きだった。一応、架空の島ということになっているが、読者にはイギリスを連想させるような工夫がしてあった。

モア自身と彼の友人ヒレス、それに架空の、アメリカ・ヴェスプッチの航海に同行した学者ヒュトロダエウスという3人の対話という形で物語は進む。ユートピアの島民は、農業と手工業を2年交代で兼務する自給自足の生活を送っている。もちろん働かず暮らそうとする怠け者などいない。といって仕事に追われるばかりではなく、睡眠時間以外は学習に使われるなど教養を磨くことも忘れていない。

また、土地も道具も共有で、貨幣は存在しない。それでは貨幣の基準になる金は何に使われているかといえば、これがなんと便器。理想社会でたいせつにされるのは金や銀ではなく、鉄やガラス、土など。生活に必要な食器には土器やガラス器を使い、金や銀は使器や奴隷をつないでおく足かせ、犯罪者のシンボルである耳輪や首輪、頭の帯などに使用する。つまり、理想社会では金や銀などその程度の価値しかなく、恥ずべきものののだ。

まさに絵に描いたような理想社会だ。この物語は、西方に幸せの島があるという伝承と結びついて、新しい国家意識に目覚めつつあった当時のイギリス国民に広く受け入れられた。こうしたモアの思想が、後の社会主義思想の先駆けになったという人もいる。

だが、同時に、こうした社会に進歩が望めないのも事実。社会的分業は発展しないし、生産力の上昇は望めない。労働は重視されても欲望は統制され、奴隷制度を設けて不愉快な仕事は彼らに押しつける。いわば強制収容所のような社会だとも考えられるのだ。

天国と地獄は紙一重。モアの夢見たユートピアが、天国なのか地獄なのかはわからない。

なにしろ、現実そんな世界は存在しないのだから。

## カクテルの名にもなったブラッディ・メアリはどんな女王？

若い女性を中心に、カクテルの人气が高まっている。そのカクテルの中でも定番のひとつがブラッディ・メアリ。ウォッカにたっぷりトマトジュースを注ぎ、ウスター・ソースを数滴垂らしたもの。

さて、このブラッディ・マリイの「ブラッディ」とは、カクテルの色が赤い血の色を連想させることから。そして、「メアリ」とはイングランド初の女王であるメアリ女王（在位1553～1558年）のことである。

メアリ女王は厳密に言えば初の女王ではない。マリイの弟であるエドワード6世がわずか15歳で死去した後、ヘンリー7世のひ孫であるジョン・グレイが王位についた。だが、彼女はわずか9日間で王位から引きずり下ろされ、メアリによって逮捕されてしまう。新たに女王になったメアリは、グレイとその夫の処刑を命じ、1554年、ふたりはロンドン塔で首を切られてしまったのだ。

これをきっかけに、彼女の人生は血なまぐさいものになっていく。スペインへの憧れが強かった女王は、スペイン王子フェリペ2世との縁談話を強引に進める。イギリスがスペインの属国になるのではないかと、多くの人が反対したにもかかわらず、まったく聞き入れず国民の反感をかけてしまう。

また、その間、カトリック信仰を表明した彼女はプロテスタントを弾圧。聖書の改定に加わったオックスフォード大学の学者や聖職者などをつぎつぎに火あぶりの刑にし、4年間で300人のプロテスタントを火あぶりの刑に、2000人の聖職を剥奪した。こうした過酷なプロテスタントへの迫害から、彼女は「血まみれのメアリ」の異名をとることになったのだ。やがてカクテルの名まえにまでなってしまうのだから、その血なまぐさは半端なものではなかったのだろう。

メアリは自分の腹違いの妹であるエリザベスさえも、自分に代わって王位につける計画があると知ると、彼女をロンドン塔に幽閉した。だが、いくらブラッディ・メアリでも、実の妹だけは処刑できなかったようで、数週間後彼女

は釈放された。

さて、そんなメアリを失脚に追い込んだのは、夫の国スペイン。フランスと戦争を始めたスペインに助太刀して参戦したものの、フランスにただひとつ持っていた領地カレーを失ってしまう。これによって彼女は王位を去ることを迫られ、失意のうちに他界した。42歳だった。

## エリザベス1世はなぜ結婚しなかったのか？

一生を独身で通し、仕事に情熱を傾けるキャリアウーマンはいまではすこしも珍しくない。だが、そうした女性が少なかった時代に、そんな生き方を選んだ女性がいた。1558年に即位したイギリス・テューダー朝最後の女王のエリザベス1世だ。

彼女の母アン・ブーリンはヘンリー8世の王妃。ヘンリー8世にはすでに政略結婚の王妃がいたのだが、愛人だったアン・ブーリンが前王妃を追い落として王妃となり、エリザベスが誕生するのだ。ところが、その後、アン・ブーリンは男子を流産してしまったことから、反逆と姦通の罪で処刑され、エリザベスはわずか3歳で母を亡くすことになる。

父王ヘンリー8世は女好きで、離婚したり、処刑してしまったりして、結局、7人の王妃がいたことで有名である。そのため、エリザベスにはメアリのほかに、エドワードという異母弟もいた。

こうした複雑な生い立ちから、王位継承の有力候補として、対立する勢力から憎まれたことが彼女をますます不幸にした。ヘンリー8世の死後エドワードが即位し、彼が死ぬと義姉メアリ1世が即位したが、有力な対立候補であったエリザベスは、メアリ1世の在位中、ロンドン塔に放り込まれたこともあった。

だが、不幸は彼女を強くした。成功をおさめるためにはあらゆる機会を利用しなければならない。やがて王位についた彼女は、自分の結婚話を外交手段に利用する。スペイン王フェリペ2世をはじめ、フランス王シャルル9世、スウェーデン皇太子エリック、神聖ローマ皇帝の三男カール大公などからつぎつぎに舞い込んだ結婚話に対して、曖昧な態度をとって、回答を引き延ばしながら他の国をけん制するという、外交戦略を駆使したのだ。

そのためには、もちろん独身でいなければならない。結婚してしまえば、縁談話を利用することができなくなるので、彼女はなかなか結婚しなかったのである。

しかも、彼女は「処女王」をキャッチフレーズに国民の人気を得ることに成功した。

スペイン王との結婚を断るときには、「私はすでに国家と結婚していますので」と名ゼリフを吐いたという。

もともと、彼女が生涯結婚しなかったのは、まともに結婚して子どもが産める体ではなかったからだという説もある。また、「処女王」と呼ばれていても、実際には愛人がいた。

しかし、彼女のおかげで、イギリスは海外市場を開拓し、未曾有の発展をとげることができたのである。

## いずれも不幸な結末を迎えたフェリペ2世の結婚歴

何度結婚してもうまくいかない人がいるものだ。16世紀に「太陽の沈まぬ帝国」といわれたスペインに君臨したフェリペ2世もそんなひとり。生涯に4度結婚したが、その結末はいずれも不幸に終わっている。

最初の結婚はまだ16歳のとき。相手は17歳のポルトガル王女マリア・マヌエラ。こんな年齢どうしたと、周囲が無理やり結婚させたのかと思いがちだが、実際は熱烈な恋愛結婚だったという。ところが、2年後にふたりのあいだに生まれた王子ドン・カルロスは、生まれつきひ弱だった。そして、マリアは彼を産むと間もなく亡くなってしまった。

続いて、2度目は27歳のとき。今度の相手は従姉妹にあたる38歳のイングランド女王のメアリ1世。だいたい年上だったせいか、王は妻に無関心で、最初の1年しか妻と過ごさなかった。しかも、結婚から4年後に彼女は亡くなってしまったのだ。

そこで、王はメアリの異母妹のエリザベス1世にプロポーズする。処女王といわれ、あちこちから縁談話を持ち込まれていた彼女は、フェリペのプロポーズを断ってしまう。それどころか、新大陸に向かうスペイン船を海賊を使って攻撃し、略奪を繰り返した。そこでフェリペは自慢の無敵艦隊を派遣したが、イギリス艦隊に粉碎されてしまう。

プロポーズ相手に大ハジをかかされたわけだ。

そして、フェリペの3度目の結婚は32歳のとき。相手はなんとまだ15歳のフランス王女エリザベート。しかも、彼女は当時14歳だった王子のドン・カルロスの婚約者だった。息子の婚約者を奪ったため、王子は父を憎み、両者は対立。やがて、王子は逮捕され獄死してしまう。こんな悲劇まで生んだエリザベートとの結婚だったが、この結末もまた不幸だった。彼女はふたりの娘を残してわずか23歳で亡くなってしまう。

その後、フェリペは43歳のときに、神聖ローマ皇帝の娘アナ・デ・アウストゥリア、つまり自分の姪と4度目の結婚をする。だが、この最後の結婚もけっして順調ではなかった。

アナは結婚から10年後の1580年にインフルエンザで死んでしまう。近親婚だったせいか、彼女が残した5人の子どものうち8年以上生きたのは、のちのフェリペ3世だけだった。

ところが、こうして4度の結婚がごとごとく不幸に終わったフェリペには、さらに愛人もいた。寵臣ルイ・ゴメス公爵の妻エポリだが、夫の死後乱行を重ね、宮殿の陰謀にも関わった疑いで、後に幽閉の身となって死んだ。妻だけでなく愛人まで亡くしてしまうとは、フェリペ2世はよほど女運が悪かったのかもしれない。

### サド侯爵は、じつはサドではなくマゾだった？

「SM」というのはサドとマゾ、つまりサディズムとマゾヒズムのことをいう。どちらも性的な倒錯で、サディズムは他人に身体的・精神的な苦痛を与えることで性的満足を得るもの。これに対してマゾヒズムとは逆に他人から身体的・精神的な虐待・苦痛を受けることによって性的満足を得るものだ。

このうちサディズムは、18世紀にこうした性的な乱行を小説の主題にしたフランスのサド侯爵（1740～1814）にちなんで命名された。『悪徳の栄え』『ソドムの百二十日』といった作品を見ると、たしかにその内容はサディズム一色。ふつうの人にはとても理解するのがむずかしい過激な内容だ。

こうした小説を書いただけに、サド侯爵自身もサディストだと思われがち。なにしろ彼は生涯の3分の1を監獄で過ごし、最後は病院で死んだといわれる。監獄に入れられたのも、夜ごと女性たちと淫乱で過激な性的生活を送っていたからだとされているのだ。

ところが、その後の研究で、彼には政治運動や筆禍事件はあるものの、具体的な性犯罪歴はなく、不当な監禁だったらしい。

しかも、実際にはサディズムの傾向もなかったようなのだ。世間のイメージは作り話だった可能性が高いのである。

ただし、まったくまともだったということでもないらしい。彼は、女性に自分の尻をムチで打ってもらうのが好きだった。また、従者のひとりを愛人にして「ご主人様」と呼んだり、自分のことを「ラ・フルール（花）」と呼ばせたりしていた。

つまり、サディストではなくて逆にマゾヒストだったらしいのだ。

サドもマゾも性的倒錯という点では同じ。それだけにマゾヒストのサド侯爵には、サディズムをテーマにした小説が書きやすかったのかもしれない。

### マリー・アントワネットの不幸な結婚を予言したゲーテ

フランス革命で処刑されたルイ16世の王妃マリー・アントワネット。彼女の死をまえもって予知していたかもしれない意外な人物がいる。ドイツの大作家ゲーテだ。

1770年5月、オーストリアの公女マリー・アントワネットがフランス王子と結婚することになった。花嫁の引き渡し式は、国境の町シュトラスブルクで行なわれることになった。式場についてはさまざまな議論のすえに、オーストリア側からはいつて、フランス側に抜けるような仮の式場を建てて、そこで行なうことになった。

そしてこのとき、シュトラスブルク大学の学生だったのが、のちに小説『若きウエルテルの悩み』で疾風怒濤期の代表作家となったゲーテだ。当時まだ20歳だった彼は、花嫁の引き渡し式が行なわれる式場をこっそり見に行った。ところが、大広間の壁に飾られたゴブラン織の壁掛けを見て、ひどく憤慨し、思わず「何だこれは！」と叫んだの



だ。

それはフランス人の画家がギリシア神話の『王女メディア』をテーマに描いた絵を下絵にしたもの。自分を捨ててコリントの王女グラウケと結婚しようとするイアソンに怒り狂ったメディアが、結婚祝いにグラウケに竜の血を染み込ませた服を贈る。グラウケがそれを身につけると、突然炎をあげて燃え上がり、グラウケは悲鳴を上げて悶え苦しむ。それでも気がすまないメディアは、イアソンとのあいだに生まれたふたりの子どもを殺して、竜車に乗り、空中を走り去る。そんな世にもおそろしい物語を描いたものだったのだ。

もちろんこんな絵は結婚にはふさわしくない。どうしてこんな壁掛けが飾られているのか。ゲーテは怒ると同時に、それがマリー・アントワネットの未来を予言しているのではないかと不安な気持ちになった。そして、それから23年後の1793年、マリー・アントワネットはギロチンにかけられ、刑場の露と消えたのだ。

ところで、この花嫁の引き渡し式で、もうひとつ興味深いエピソードがある。マリー・アントワネットは、故国オーストリアからついてきた人たちの前で身につけていたものをいっさい脱ぎ捨て、フランス製の服に着替えて大広間にはいったといわれる。それは故国との別れを象徴した儀式でもあった。

この話は彼女の伝記に描かれたシーンなので、世界的に有名になったが、その後、出版された別の作家の伝記では、当時はそうした古い習慣はもう行なわれていなかったと否定されている。もしかしたら、劇的な人生を彩るために脚色された作り話かもしれない。彼女の人生はそれほどドラマチックだったというわけだ。

### ヘレン・ケラーよりもまえに三重苦を克服していた人物がいた

アメリカの女流教育家で社会福祉事業家のヘレン・ケラー（1880～1968）は、目が見えず、耳が聞こえずに口もきけないという三重苦を克服した人物として知られている。その生涯はたくさんの伝記や舞台、映画などになっているが、じつは、そんな彼女よりも先に三重苦を克服した人物がいたことは意外に知られていない。

1829年、ニューハンプシャーの富裕な農家に、ローラ・ブリッジマン（～1889）という女の子が誕生した。8人兄弟の3番目として生まれた彼女は、ふつうの子どもと同じように元気に育っていたが、2歳のときにしょろ紅熱にかかり、目は見えず耳も聞こえなくなってしまう。おまけに、嗅覚と味覚もかなり失ってしまったのだ。

当時は、聴覚と視覚に両方とも重い障害を持つ者には、意思疎通の方法を教えることはできないというのが定説になっていた。そのため、家族も彼女をどう扱ったらいいかわからずにとまどうばかりだった。

そんなローラに転機が訪れたのは7歳のとき。彼女について書かれた新聞記事を見たボストンの盲学校校長サミュエル・グリドリー・ハウ博士が、彼女を教育してみようと考えて引き取ったのだ。

博士は、まず皿や銀器といった日常使うものに、文字の盛り上がったラベルを貼り、ラベルと品物とを合わせるように教える。ローラはすぐにそれができるようになり、しかも数週間後には自分がしていることの意味まで理解するようになった。それでも、当時はまだ点字も手話法もなかっただけに指導は困難で、ローラが新しい言葉をいいたいときには、ゆっくりと指をアルファベットに置いていくしかなかった。そのため、右と左のちがいを教えるだけでも1時間もかかるほどだった。

こんな苦勞を乗り越えて、ローラは数カ月後には母に手紙を書くことができるようになった。数年後に文法をマスターすると、詩や自伝まで書けるようになったのである。

ローラのこうした進歩は、ハウ博士が早くから論文として発表したためアメリカ内外で広く知られるようになった。そして、多くの教育者が、障害者に対してローラと同じような教育を行なった。そうした教育者の中には後にヘレン・ケラーを教育したアン・サリヴァンもいた。彼女はハウ博士の盲学校で訓練を受けてから、ケラーの教育を始めた。

つまり、ヘレン・ケラーが三重苦を克服できたのは、ローラ・ブリッジマンが先に三重苦を克服できたからなのだ。

### シュリーマンの発掘の動機は彼のデッチ上げだった？

トロイ遺跡を発掘したドイツの考古学者ハイリンリッヒ・シュリーマン（1822～1890）。彼にとって、幼

いころの思い出が偉大な発掘の原動力になった。

シュリーマンがまだ小さかったころ、彼は古代ギリシアの大詩人ホメロスが残した二大叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』を知った。彼はそれがただの物語ではなく、ほんとうにあった出来事だと信じ、いつかその遺跡を発掘したいと思うようになった。

とくに、彼をワクワクさせたのは、クリスマス・プレゼントに父からもらった『子どものための世界史』という本。そこには、燃え盛るトロイの町、巨大な城壁、スカイヤ門などが描かれていた。

やがて大人になったシュリーマンは、子どものころからの夢をかなえるため、シロイやミュケナイの遺跡の発掘を行ない、1871年、ついにそれを実現したというわけである。

ところが、こんな感動的な話が、彼のデッチ上げた作り話ではないかという疑いが出ている。

子どものころ、彼を夢中にさせたという『子どものための世界史』について、シュリーマン自身が初めて触れているのは、トロイが発掘されたのちの、彼が53歳のときの手紙でのこと。そして、かつて商売をしていたころのシュリーマンは、少年時代の夢についてはまったくにも語らず、ただ商売のことだけに一生懸命な人物だったという。また、たしかに彼の蔵書のなかには1828年版の『子どものための世界史』という本があったが、いつその本を手に入れたかは不明。

さらに、そこに書かれたサインは筆跡鑑定によって、子ども時代のものではないこともわかったからだ。

しかし、動機がどうであれ、シュリーマンの偉大なその業績は、すこしも色あせるものではないことも確かなのである。

### 慈善家のカーネギーはほんとうにいい人だった？

アメリカ、ニューヨークにある世界的に有名なホールがカーネギーホール。その名称は創設者の名まえからとったもの。このカーネギーという人物は想像を超えるスケールの慈善事業家だった。

アンドリュー・カーネギーは、1835年にスコットランドの貧しい織物工の息子として生まれた。13歳のときに家族とともにアメリカに移住し、幼いころから一家の働き手となるなど苦労を重ねた。そして、21歳で最初の投資を行なったのをきっかけに、しだいに資産を増やし、その後、鉄鋼業に進出。巨万の富を築き、「鉄鋼王」と呼ばれた。

彼は貧しい家に生まれただけに、小さいころから金銭に対して鋭敏な感覚を持っていた。

会社経営にあたって、徹底してコスト削減に努め、どちらかといえばビジネスのことだけを考える、冷徹で情けない経営者だと見られていた。

ところが、そんな彼の後半生はそれまでの生活とはまったくちがうものになった。1901年に資産を売却して引退すると、その富を社会のために使わなければならないと考えて、数々の慈善事業を展開。おもな事業をあげただけでも、教会へのオルガンの寄贈、数々の図書館の創設、ニューヨークのカーネギーホールやピッツバーグのカーネギー会館の建設、病院や公園の建設、教育機関や平和機関への投資など。どれも当時の社会にとってはたいせつな事業ばかりだった。

どうやらカーネギーは、若いころから慈善事業の必要性を感じていたらしい。政治や経済、社会問題などにも関心を持ち、金儲けはけっして良心の声に従うことにならないことを確信していた。「金儲けは最悪の目標である」とまでいっているのだ。そして、いつか仕事から身を引いて、貧しい人の役に立ちたいと考えていた。そんな思いが、ようやく実現して数々の慈善事業をスタートさせたわけだ。

こうした例はけっしてカーネギーだけではない。アメリカでは、ロックフェラーやフォードなど、大富豪が慈善事業を手がけるケースが多い。だが、そうした人びとがどちらかといえば老後の片手間の仕事として慈善事業を行なったのに対して、カーネギーは「本業」として専念した。ただお金を出しただけでなく、その使い方にまで細かく気を配ったという。しかも、彼が慈善事業に使った金額は3億5000万ドル。これは、1906年にサンフランシスコを襲った大地震の被害総額にほぼ匹敵する額。つまり、ひとつの都市を復興させるほどのスケールだったのである。

## 妻から逃げるために家出？ 悲惨な最期を迎えたトルストイ

『戦争と平和』『アンナ＝カレーニナ』『復活』などで知られるロシアの文豪トルストイ。

人間の内面生活を描き、生涯を通して思想的探求を続けた彼の人生は、波乱のうちに終末を迎えた。

本来なら、作家として最も脂がのった時期を迎えようとする50歳のとき、トルストイは『我が懺悔』という本を書きはじめ、それまでのすべての仕事を「くだらない仕事」「悪徳の書」と否定した。そして、「夢からさめた」といって、すべてを捨て去る決意をしたのだ。当時、彼には妻や子どもがいたし、伯爵の地位も得ていた。毎年、たくさん印税もはいつてきたが、それらをすべて捨て去ってしまうというのだ。

家族は当然、猛反対した。妻ソフィアはトルストイの頭がおかしくなったと思い、ヒステリー症状を起こしはじめた。そんな妻を見たトルストイは、妻が姦通しているという妄想にとりつかれるようになる。ふたりの争いは泥沼へと突入。トルストイが亡くなるまで30年近くもこの泥沼状態が続く。

その間、トルストイは何度も家出を計画する。だが、ほんとうに家出したのはずっとのちのことである。計画はするものの、いざ実現というところで思いとどまってしまう。

「家を出る！」というたびに妻が「自殺する！」と騒ぎ立てるために、なかなか決断することができなかったのだ。

それが実現したのは1910年、なんとトルストイ82歳という高齢のとき。その代価は非常に大きなものとなった。

「私は私のような齢の人間がまずやらないことをする—— 最後の日々をひとり静かに過ごすために世界を捨てるのです」と書いた置き手紙をして、妻に48年間の結婚生活を感謝したうえで、あとを追わないように頼んだ。

トルストイはひっそりと家を出て、二等車や三等車に乗って、なるべく人目を避けようとしたが、それでも有名人の彼の家出はすぐに世間に知れてしまう。

家出からたった4日目、トルストイは汽車の中で発熱し、リャザン・ウラル鉄道のアスターボヴオ駅の駅長室に運び込まれる。そして、やがてかけつけた家族に見守られ、亡くなるのだ。

ところで、これほど仲の悪かったトルストイ夫妻なのに、ふたりのあいだには13人も子どもがいて、最後の子は彼が60歳のときにできたというから、夫婦とは不思議なものである。

## 「大粛清」を行なったスターリンは自分の子どもにも冷たかった？

レーニンの死後、ソ連の権力を握り、「大粛清」を行なって個人独裁体制を確立したスターリン。その怖いイメージそのままに、彼は自分の子どもたちに対しても冷酷だったといわれている。なにしろ1928年に彼の長男ヤーコフが銃で自殺しようとしてケガをすると、ケガの具合を心配するどころか、「まったく。真っ直ぐに撃つこともできるのか」と冷たく言い放ったといわれるぐらいなのだ。

スターリンは、最初の妻に先立たれて、長男ヤーコフを妻の両親に預けた。その後、ふたり目の妻と再婚して、ふたりの子どもをもうけるが、今度は妻がスターリンの大粛清を苦に自殺。しかたなく子どもたちを乳母と家庭教師に育ててもらう。

一方、長男ヤーコフは第二次世界大戦が始まると砲兵部隊の中尉になったが、1941年7月にドイツ軍の捕虜になってしまう。彼は息子解放の提案を拒否したばかりか、ユダヤ人だった息子の妻を逮捕して刑務所に入れてしまう。そのうちにヤーコフの消息は不明になり、銃殺されたとも、収容所の周囲に張られた電気の通じた金網に身を投げて自殺したともいわれている。

彼の冷たさは、次男のヴァシーリに対しても同じだった。戦後、モスクワ軍管区の空軍司令官になったヴァシーリは、メーデーに悪天候の中で飛行ショーを行ない、数機の飛行機を墜落させてしまう。スターリンは、息子にその責任を取らせて解任してしまったのだ。

公私混同しない潔い態度と見ることもできるが、それにしてもあまりにも冷酷。

そんな冷酷なスターリンも、1926年に生まれた娘のスヴェトラナに対しては愛情を示した。「私のかわいいスズメ」とか「小さな家政婦」といって溺愛。だが、成長するにつれて、ほかの子どもたち同様に厳しく対処するようになり、彼女が16歳のときに出会ったボーイフレンドの映画監督をイギリスのスパイだと断定して、北ロシアの強

制収容所に5年間も放り込んでしまった。また、1944年に別の男と結婚したときも、スターリンはこれを認めず、やがてふたりは破局してしまう。

その後、娘が2回目の結婚をして子どもが生まれたときには、愛情のこもった手紙を送るなど父親らしい愛情も示したが、娘の心の傷は消えなかったようだ。父の死後、1957年になって彼女は、姓をスターリンから母の旧姓に変えている。

政敵をことごとく消し去った冷酷な指導者だけに、こうした態度は当然といえば当然かも。でも、せめて家族にはやさしくしてあげてもよかったのに.....。

## 戦争や飛行機墜落事故を経験したヘミングウェイ

『武器よさらば』『老人と海』などの名作で知られるアメリカの文豪アーネスト・ヘミングウェイ（1899～1961）。彼は、その生涯で何度も危険な目にあっている。

たとえば、1954年、アフリカに狩猟の旅に出かけた彼は、なんと短期間に飛行機が2回も墜落するという事故に遭遇した。2回目の墜落のときには、命こそ助かったものの、打撲、火傷、脱臼、脊椎損傷などの重傷を負い、そのショックからこの年のノーベル文学賞の授賞式に出席できなくなってしまった。

だが、彼はそれ以前にも事故や戦争によって何度も命を脅かされていた。それでも、まったくひるむこともなく、活発に行動しつづけるのがヘミングウェイの生き方だった。

スペイン内戦にみずから参加し、魚を釣り、狩猟をし、闘牛やボクシングを愛するというまさに「ハードボイルド」のキャッチフレーズがピッタリの人生。

キューバのハバナに住んでいた当時は、嵐が来ると目を輝かせ、人びとに「ここを動くな!」「防衛態勢を組もう」などと積極的に指示を与えて、陣頭指揮を取っていたという。その姿は嵐という「敵」と格闘する船の船長のよう。

まさに、自作の『老人と海』の世界を地でいっていたわけである。

ところが、そんな力強い人生を送っていたヘミングウェイにとっても、晩年のこの2回にわたる飛行機事故のダメージはかなり大きかったようで、しだいに精神状態が不安定になっていった。

60歳の誕生日を迎えるころには、神経症状がかなり悪化し、支離滅裂なことを口走ったり、自殺しそうになったりした。そして、1961年7月2日の朝に、ついに小銃で自殺してしまうのだ。

不死身を誇ったヘミングウェイだっただけに、強靱な肉体が衰えたことによるダメージは想像以上のものだったのだろう。

## 世界史 20世紀の謎③ アインシュタインがイスラエル大統領候補？

有名な物理学者のアインシュタインは、第一次世界大戦中、ドイツ政府支持の声明に署名せず、国際連帯を呼びかける声明を出すなど、国際協調や平和を唱えたことでも知られている。同時に、彼はユダヤ系の出身でもあった。

そのため、ナチスによって市民権を奪われ、アメリカに永住。その後も、反ナチスの立場を貫いたため、反ユダヤ主義者から攻撃されるようになったのだ。

そうした攻撃に反発した彼は、しだいにシオニズム運動を支持するようになる。

シオニズムとはユダヤ人への差別や迫害を、ユダヤ人国家を建設することで克服しようという運動。やがて、この考えに基づいてイスラエルが建国された。そして、こうした活動が評価されて、第二次世界大戦後、アインシュタインをイスラエルの大統領に推す声があがったのだ。

アインシュタイン自身にその気はなかったようで、結局この話は幻に終わった。

もしも、彼が大統領になっていれば中東の姿もだいぶ変わっていたかもしれない。

## モノにまつわる不思議な話

### ミロのヴィーナスの欠けた2本の腕のポーズは？

パリのルーブル美術館にあるミロのヴィーナスは、世界的に有名な古代ギリシア彫刻。1820年にエーゲ海のギリシア領メロス（ミロ）島の畑で、農民によって発見された。この像の特徴は2本の腕が欠けていることで、発見当時にすでに欠けていた。それだけにほんとうはいったいどんなポーズをとっていたのか、大いに人びとの関心を集めている。

もっともよく知られているのがドイツの美術史家アドルフ・フルトヴエングラの説。彼はミロのヴィーナスの欠けた右手は左腰にあてがい、石柱に支えられた左手には丸い果物を持っていたと考えた。ヴィーナスとともに発見された腕の断片は、リンゴを持った彼女の手がちがいないと推理。また、台座は画家ドベエのデッサンに描かれたような銘文入りの台座だったとしている。

だが、この説には疑問がある。ヴィーナスとともに発見された腕の断片は、大理石の素材や仕上げが本体とはちがっていて、ヴィーナスのものでない可能性があるのだ。また、台座もドベエが描いたようなものでなく、ヴーティエによる若い男のヘルメ柱の台座のようなものだったのではないかといわれている。

一方、ハッセは、ヴィーナスは左手で髪をところとしていて、手にはリンゴではなくてヘアバンドを持っていたと推理。また、ファレンティンは、水浴中のにぞき見られて驚いたヴィーナスが左手をあげたところだと考えた。

さらに、ミリンジェン、クラック、ミュラーなどの19世紀前半の学者たちは、ヴィーナスは両手に金属製の丸い盾を持っていて、そこに映る自分の姿にうつりしていたと推理。神話での夫役である軍神アレス（マルス）の盾を持つヴィーナス像は実例があるだけに、こうした可能性も否定できない。

これに対して、ヴィーナス像は単体ではなく、カップル、あるいはグループ像だったという説もある。こうした考えに立つて、真ん中に青年ヘラクレス、右にヴィーナス、左に美德の女神を配置。神話にある「別れ道のヘラクレス」のように、ヴィーナスと質素な女神のふたりからヘラクレスが同時に誘われている、ユニークな像を想像する人もいる。このとき、ヴィーナスは美とともに欲望の女神でもあるから、左手にリンゴをかざし、右手は若いヘラクレスを指して誘惑しているという。

このようにヴィーナス像の正体については議論百出。これもヴィーナスがあまりにも美しすぎるせいかもしれない。

### 肖像画が醜く描かれていたために匈奴に嫁がされた王昭君

結婚相手の好みは人それぞれだが、できれば美男美女と結婚したいというのも願望のひとつではあろう。ところが、ブスを理由に嫁入り先が決まったという珍しい女性がいる。

その女性とは王昭君。彼女は前漢の元帝の後宮にいた。

ところがあるとき、入朝した匈奴の呼韓邪単于という若者が元帝のところにやってきた。

「漢の帝室の嬪になって、漢の親戚になりたいんです」

当時、元帝は匈奴の進入に頭を悩ませていたから、この提案は渡りに船。断る理由などない。さっそく嫁選びが始まった。

元帝は美女を集めるのが好きで後宮にもたくさんの美女がいたが、美人が好きなのに、美人を嫁にやるのは避けたかった。そこで、後宮の女性たちの肖像画の中で、もっとも醜い女を選ぶことにした。そして、選ばれたのが王昭君。その顔を見た元帝はわが目を疑った。肖像画であんなに醜い彼女が絶世の美女だったのだ。

じつは後宮の美人たちは、自分をできるだけ美しく描いてもらおうと肖像画家にひそかに賄賂を贈っていた。これに対して、自分の美しさに自信がある王昭君は実力で勝負できると考えて、あえて賄賂という汚い手は使わなかった。だが、そんな彼女の思いも、欲深い肖像画家には通じず、彼女の肖像画は醜いものになってしまったのだ。



元帝は後悔したもうあとの祭。いまさら別の相手をあてがったのでは、匈奴との信頼関係にもヒビがはいる。そこで、泣く泣く王昭君を手放すことにしたのだ。

こうしてブスだと誤解されて嫁入り先が決まってしまった王昭君。悲劇といえば悲劇だが、匈奴に嫁いでからはかなりいい待遇を与えられていたらしい。1男を産み、呼韓邪単子の死後は、正妻とのあいだの長子の妻になったともいわれている。

ところで、王昭君が有名になったのはある伝説が生まれたため。その伝説によれば、縁談話が出る前に、すでに元帝は王昭君を愛するようになっていた。だが、賄賂をもらって肖像画を描いていた画家が、悪事がばれるのを恐れて匈奴に逃亡。そこで呼韓邪単子に王昭君の肖像画を差し出し、ほんとうは絶世の美女であることを告げた。呼韓邪単子はすっかり彼女を気に入って漢を侵略したうえで嫁に要求。元帝は渋々承諾するが、嫁入りの途中で王昭君は黒河に身を投げて自殺したというのだ。

これが彼女を悲劇のヒロインにした伝説。現実とはだいぶちがうが、話としてはこのほうが劇的。この話がなければ王昭君は有名にならなかったかも？

### 古代エジプトではネコもミイラになった？

ネコはイヌとともにペットの定番。その人間とのつきあいはとても長く、古代エジプトではネコをかわいがるどころか、崇拝の対象にまでしていたという。

いつごろからネコが崇拝されていたのか詳しいことはわかっていないが、最初はネズミから作物を守る農業の神様として崇拝され、その中で人びとの生活に潤いを与えるペットとして愛されるようになったらしい。

そうした崇拝は紀元前1560年ごろから紀元前1085年ごろの新王国時代に最高潮に達した。アメンホテプ4世の宗教改革やアマルナ美術、少年王ツタンカーメンなどでおなじみのこの時代、ネコは神聖な動物とみなされ、さまざまな形で保護された。

老衰や病気でネコが死ぬと、飼い主の家族全員が眉をそって喪に服した。また、誤ってネコを事故死させた飼い主には、「今後いつさいネコを飼ってはいけない」という判決が下った。もしも、故意にネコを殺す不心得者がいれば、もちろん死刑だ。

そして、さらに驚くことに、死んだネコはミイラ職人のもとに運ばれて、香油によって処理され、亜麻布に巻かれたのちに、飼い主の財力に応じてさらに布で包まれ、棺に入れられて葬られた。つまり、ネコは死後ミイラにされて、専用の墓地に手厚く埋葬されたのだ。のちになって、大量のネコを葬った墓地が発見されている。

このほかにも、エジプト人のネコに対する異常なほどの愛情を示すエピソードが、たくさん残っている。たとえば家が火事になると、消火活動をあとまわしにしてもネコが近づかないように見張りをしたという。

こうしたエジプト人のネコに対する思い入れを利用して、エジプトと戦ったペルシアの王は城の外で捕まえたネコをつぎつぎに城内に放り込んだ。城内のエジプト人は、ネコを保護することに手いっぱい、戦いどころではなく、城はあっという間に陥落したという。

また、ネコの姿をした神も登場している。ライオンの頭を持つ女神セクメトの妹はネコの頭を持つバステト。最初は姉同様にライオンの性格を持つ神だったが、のちにネコに取って代わられたといわれている。バステトに対する人びとの思い入れは特別だったようで、しだいに家で飼っているネコは生ける化身バステトの現身だとみなされるようになった。

とにかく、至れり尽くせりの大サービス。このあたりは江戸時代に出された「生類憐みの令」でイヌがたいせつにされたケースを連想させるが、それをはるかに上回るかわいがり方。現代の愛猫家もとてもかなわないだろう。

### 火薬は失敗が生んだ産物だった？

中国の三大発明といわれるのが羅針盤、印刷術、火薬。そのうちの火薬は、意図的に開発されたものではなく、偶然の産物らしい。

中国漢民族の伝統的な宗教である道教では、「不老不死」が大きなテーマになっていた。

そこで、道士たちは不老不死の妙薬を作ろうと一生懸命に薬品を調査していた。その結果、間違ってたものが火薬だったのだ。

火薬の原料は硝石、硫黄、炭素。このうち硝石は、あらゆる鉱石を溶かし、とくに不老不死に欠かせないとされる水銀を分離することから、道士は注目した。これに硫黄と、炭素を出す枯草やハチミツを混ぜて調合したところ、急激に燃え上がったことから火薬のもとができあがったというわけ。永遠の命を得るはずの薬が、人を傷つける火薬になってしまったのだから、なんとも皮肉なものである。

さて、こうして偶然できた火薬は、11世紀ごろには早くも爆燃弾として使われている。

そして、火薬が戦争に役立つことを知った政府は、1067年に硝石と硫黄を外国人に売ることと、民間で取引することを禁止した。

しかし、武器の開発は続き、13世紀には火薬は臨界点である硝石含有率75パーセントに達した。それからまもなく、小銃や大砲が開発され、火薬の需要がいきなり拡大することになるのだ。

ところで、三大発明をするほど、産業技術そのものは古代から発達してきた中国だが、政府がそれを積極的に利用するようになったのは、かなりあとになってからのことである。

当初は政策として科学を振興したり、技術を活用しようという動きはあまり見られなかった。

それが体系的にまとめられたのは、15世紀になって実学の傾向が強まってからのことなのである。

### アイスクリームやパスタはマルコ・ポーロが「発見」した？

『東方見聞録』でおなじみのマルコ・ポーロは、1270年すえに、元に向かう父と叔父に伴われてイタリアのヴェネツィアを出発。1274年にフビライに謁見して任官し、中国をはじめアジア各地を歴訪後、1295年に故郷のヴェネツィアに帰国した。

彼はヨーロッパ人の東洋に対する考え方に大きな影響を与えたが、同時にヨーロッパに多くのものをもたらしただ。たとえばアイスクリーム。5世紀ごろの中国では皇帝のデザートとして、樟脳で香りをつけた米と牛乳でつくった氷菓がつくられていた。これが、やがてアイスクリームとなって一般にも普及。マルコ・ポーロが北京を訪れたころには、もう街角で売られていた。そこで、彼は帰国に際して製造法を持ち帰り、これによって初めてヨーロッパにアイスクリームが登場することになったのだ。

ちなみに、それまでヨーロッパでは、貴族のあいだで果物と砂糖を凍らせたシャーベットのようなのは食べていたが、牛乳を使ったアイスクリームは製造されていなかった。

また、現在ではイタリア料理の代表的存在のパスタも、マルコ・ポーロが持ち帰ったものだという説がある。マルコ・ポーロ以前には、パスタ料理が食べられていたという歴史的証拠が見つかっていないからだ。そのため、中国のラーメンがヨーロッパにはいり、スパゲティになったのではないかと。ひょっとすると、ラビオリもギョウザをマネてつくったものではないか。そんな仮説を唱える人がいる。

ところで、有名な『東方見聞録』は、マルコ・ポーロが自分で書いたものではなく、彼がジェノヴァ軍との戦いに参戦し捕虜になったときに、同じ捕虜仲間だった冒険作家ルスティケロが、口述筆記で出版したもの。見知らぬものがたくさん飛び出すアジアの旅行話は、当時のヨーロッパ人にとってはきつと驚きの連続だったことだろう。

### 『最後の晚餐』が完成後10年を経ずして傷みだした理由とは？

イエス・キリストが死の迫ったのを悟って、訣別のために十二使徒と共にとった最後の晚餐。これがキリスト教会におけるミサの原型だ。この光景は、絵画のテーマとしてもしばしば取り上げられたが、なかでも有名なのがレオナルド・ダ・ヴィンチによる『最後の晚餐』。イタリアはミラノのサンタ・マリア・デル・グラーツィエ修道院の食堂の壁に描かれている。

この絵は1497年に完成した。フレスコという伝統的な壁画の技法を嫌ったダ・ヴィンチは、最新の技法を駆使してこの作品を描いた。だが、これが災いして、完成後たった10年を経ずして、絵の具が碎片となって壁面からはがれはじめてしまった。

フレスコ画は2000年以上の歴史を持つ伝統の技法。有名なミケランジェロの『最後の審判』などもこの方法で描かれている。塗らたての生乾きの漆喰に、水性の絵の具で描き、漆喰の乾燥とともに画面に耐水性が生まれる。そのため、英語の「フレッシュ（新鮮な）」にあたるイタリア語の「フレスコ」の名がついたのだ。

耐水性は壁画には不可欠。これがなければ壁画の耐用年数は極端に短くなってしまふ。だが、その一方で耐水性を得るために、漆喰が乾燥するまに絵を描かなければならず、そのため細かい技法が使いにくく、おおざっぱな筆使いになってしまう欠点もある。それが、ダ・ヴィンチにはがまんできなかつたのだ。

ダ・ヴィンチが『最後の晚餐』を描くにあたって用いたのは、樹脂を混入した漆喰で壁面を下塗りし、鉛白という白い顔料をひいた上に、テンペラ絵の具で描くというもの。これなら、漆喰の乾燥にせかされることもなく、普通の板に描くような感覚で思う存分技術を駆使することができる。ダ・ヴィンチにとってはじつに描きやすい技法だった。

ところが、この新技法は、絵の具を壁面に定着させることができずに、短期間で壁面に亀裂ができ、絵の具がポロポロとはがれてくるという致命的な欠点を持っていた。そのため、『最後の審判』も早くから傷みだし、原型をとどめないほどになってしまった。これでは、せっかくのダ・ヴィンチの技法もよくわからない。彼の芸術へのこだわりが、逆に不幸な結果をもたらしてしまったわけだ。

その後、絵は何度も修復され、現在ではオリジナルとは似ても似つかない絵になっているといわれる。最近では、最新技術を使ってダ・ヴィンチのオリジナルをコンピュータ・グラフィックスで再現する試みも行なわれている。

## 『モナ・リザ』は2枚存在する？

謎の微笑で有名なレオナルド・ダ・ヴィンチの名画『モナ・リザ』。その微笑同様に、モデルについても謎が残る。

イタリア・ルネサンス期の画家であり建築家、美術史家のヴァザーリが書いた『レオナルド・ダ・ヴィンチ伝』は、モナ・リザに関する貴重な情報源。その中で、モナ・リザのモデルはフィレンツェの大商人の妻であるジョコンダ夫人だとされている。だが、ダ・ヴィンチがこの絵を描きだしたとされる1503年ごろの彼女は24歳前後。これに対して、モナ・リザに描かれているのは30～40代前後の女性だというのが定説になっている。また、この本では、モナ・リザは未完のままになったと書かれている。実際のモナ・リザには眉毛や睫毛がほとんど描かれていないのに、それらをほめた記述も見られる。

こうしたことから、ヴァザーリがいうモナ・リザは、現在ルーヴル美術館にある世界的な名画ではなく、別な絵ではなかつたのかという疑惑が浮上しているのだ。

これを裏付けるように、「もう1枚のモナ・リザ」の候補がいくつか登場している。たとえば、ヘンリー・ビューリッツァ博士が1962年に手に入れた絵画。ヴァザーリの記述どおりに未完成品で、眉毛などの特徴がすべて一致している。そのため、博士はこれこそが本物のモナ・リザだと主張したが、絵の背景があまりにも素人くさいといった指摘もあつて、本物だと断定されるところまではいっていない。

また、1797年に、あるアメリカ人がフランスから持ち帰ったコレクションの中の『尼僧——レオナルド・ダ・ヴィンチ作品』と題された作品も有力な候補だ。フランス王妃マリー・アントワネットから直接贈られたものだとされ、ルーヴル美術館にあるモナ・リザとそっくり。詳細な調査の結果、筆使いがダ・ヴィンチ独自の技法を用いていることなども明らかになっている。

ある説では、1枚目のモナ・リザは商人の妻だった当時のジョコンダ夫人を描いたもので、2枚目のモナ・リザはのちに彼女が権力者メディチの愛人になった姿を描いたものだという。あるいは、ただ1枚目のモナ・リザを気に入ったメディチが「自分にも同じものを描いてくれ」と依頼しただけという説もある。いずれにしても、ルーヴル美術館にあるモナ・リザはオリジナルではなく、あとから描かれたというのだ。

真相は不明だが、画家が好みのテーマの絵を何枚か描くことは珍しいことではない。だから、モナ・リザが2枚あつたとしてもけつて驚く必要はないのかもしれない。



## もうひとつのキリスト教史。「かつら」で教会は大騒動

「かつら」といえば、ハゲ頭を隠すちよつと恥ずかしいものというイメージがある。だがもともとは装飾のためのファッションアイテムだったのだ。

かつらは古代エジプト、ペルシア、ローマなどですでに見られた。エジプトでは体毛をそる習慣があり、工侯貴族の男女が太陽から頭を保護するために、人毛を植えたかつらを着用していた。また、ヨーロッパでも独自にかつらが考案され、染料が発達してからは、金髪など流行の色に染めたかつらが着用されるようになった。こうしたかつらは、一種のファッションであり、しかも、公式の席には欠かせない正装用品のひとつとして使われていたのだ。

そんなかつらがキリスト教会からは冷遇された。1世紀、キリスト教会の教父たちは、かつら着用者はキリストの祝福を受けることができないという決定を下した。また、2世紀にはギリシアの神学者テルトゥリアヌスが、「かつらはまやかして悪魔の発明品」と説教。さらに、3世紀になると、司教キプリアヌスが「あなたがたに異教徒に勝るところがあるだろうか？」とかつら着用者を糾弾し、彼らの礼拝参列を禁止した。そして、692年のコンスタンティノープル公会議では、かつら着用をやめないキリスト教徒を破門するという事態にまで発展したのである。

これだけかつらが嫌われたのは、自然の髪の色を人工的に変えたりすることは、神の教えに反する行為だという考えがあったためらしい。

だが、いくらキリスト教会の権威が強くても、社会の変化を無視することはできない。

1517年の宗教改革がきっかけで信徒が減少すると、教会は初めてかつらやヘアスタイルに対する規制を緩和したのだ。

ところで、初めのうち装飾用だったかつらだが、やがて別の目的でも使われるようになる。エリザベス1世が着用したのは赤みがかったオレンジ色のかつら。彼女はそれを実用的な目的で使用していた。つまり、薄くなっていく頭髪を隠すために使用したわけ。

こうした使い方が増えるにつれて、それまでは派手に目立っていたかつらも、地味で自然の髪の毛と変わらないものが主流になった。これが、現在のかつら事情にもつながっているのだ。

とはいうものの、最近はファッションとして派手なかつらをかぶる女性も増えている。

歴史は繰り返すというが、かつらの歴史も繰り返すのかも……。

## 裸体を批判され、腰布をつけざるを得なかった『最後の審判』

ローマのサン・ピエトロ寺院のシステナ礼拝堂には、世界美術史上最大の傑作とたたえられるミケランジェロの名作『最後の審判』がある。最近、お色直しが完成したことでも話題になったこの壁画には、意外な過去があった。

ミケランジェロは、1535年、新教皇パウルス3世からシステナ礼拝堂正面の大壁画を描く依頼を受け、当時としては老齢の60歳という年齢にもかかわらず制作にとりかかった。そして6年の歳月をかけて1541年に『最後の審判』を完成した。

ところが、この絵が意外な波紋を巻き起こした。大壁画の中央には「怒れるキリスト」がたくましい肉体をもつ裸体の巨人として描かれるなど、裸体の人物がたくさん登場したからだ。これに対して教会側は、「尊い場所に破廉恥にも恥部を見せる裸体を描くなど不謹慎だ」と非難した。こうした非難は制作中から続いていて、それに反発したミケランジェロが、教皇庁儀典長の顔を地獄の王ミノスの中に描き込んでしまうということまであった。

完成後はいっそう非難が強まり、「聖者たちに淫売宿の者でさえ目をそらすような、生殖器を見せて悦惚とした姿をとらせている」といった誹謗中傷まで呼んだ。そして、教皇は、この壁画の全面的な取り壊しを検討したが、結局、裸体の人物に対しては腰布を巻くことで妥協した。しかし、ミケランジェロ自身が描き直しをすることを拒否したため、彼の弟子が腰布を描き加えた。そのため、この弟子は「腰布描き」というありがたくないあだ名をつけられることになった。

さて、こうして腰布付きの『最後の審判』が長いあいだ飾られてきたが、最近になってローマ教皇庁は、この腰布を取ってオリジナルのミケランジェロの絵に戻すことを承諾した。それとともに長い歳月にできた傷や傷みも修復され、1994年2月にリニューアルされたのだが、全部取り去られるはずだった腰布の一部は残された。それは、ミ

ケランジェロが教皇庁儀典長の顔を描き込んだという地獄の王ミノスの像である。

今回、この像の腰布を消してみたところ、ミノスの男性器が大蛇に噛みつかれているというショッキングな姿が明らかになった。いくらなんでも、これではあまりにも生々しすぎると、この部分にはふたたび腰布が巻かれることになったのである。

こうして、ごくオリジナルに近い姿に戻った『最後の審判』だが、ミノスの腰布も消さなければ、ミケランジェロ大先生は満足してくれないだろうか？

## タバコを吸うために戦った？ イギリスのピューリタン革命

健康に悪いといわれながらも、まだまだ愛好者が多いタバコ。そのタバコをめぐるイギリスで大事件が起きた。コロンブスが発見した新大陸で見つかったタバコをイギリスに伝えたのは、スペインの無敵艦隊を撃破した海賊のフランシス・ドレークやウォーター・ローリーたち。ローリーが自宅でタバコを吸っているのを見て、火事だと勘違いした下男が、慌ててバケツの水をかけたというエピソードも残っている。

彼らが伝えたタバコは、初めは精力剤として紹介されたが、その後パイプタバコが流行するとこれがイギリス紳士のシンボルとなって、イギリス全土に広まっていった。

だが、こうした傾向に危機感を持った人物がいた。王権神授説の主張者だったジェームズ1世だ。大のタバコ嫌いだった彼は、イギリス王に即位した翌年の1604年、『タバコへの挑戦』と題する論文を発表。喫煙は野蛮人の悪しき風習だと非難した。そして、これをきっかけにイギリスじゅうでタバコ論争が巻き起こったのだ。

ちなみに、ジェームズ1世はローリーを迫害したが、それは彼が大のタバコ嫌いだったからだといわれている。1605年には、オックスフォード大学でジェームズ1世も参加して、タバコ大討論会が開催された。王はこの場でタバコ禁止派が多数を占め、国民に対してタバコ禁止令が出せるようになることを期待したが、実際は賛成派が予想以上に多く、禁止令を出すことはできなかった。そこで、彼は苦肉の策として、輸入されるタバコに高い関税をかけると同時に、タバコの販売を専売制にした。

その後、ジェームズ1世の息子のチャールズ1世が父のあとを継いだが、彼もまた専売制を強化し、しばしば喫煙を取り締まるなどタバコに対して厳しい態度をとった。しかも、議会を無視した専制政治を行なったために議会との対立が激しくなる。そして、こうした対立がとうとう内乱に発展してしまったのだ。

1649年、クロムウェルらの率いるピューリタン（清教徒）を中心とする議会軍は、王の軍隊を破り、王を処刑して共和制を樹立する。これをピューリタン革命という。ピューリタン革命の勝利は、王の専制政治に対する勝利であると同時に、喫煙者の勝利でもあった。そのため、革命後のイギリスでは人びとは堂々とタバコが吸えるようになり、喫煙者がいっそう増加したのだ。

## 名器「ストラディヴァリウス」の偽物をつくったのは息子たち？

世界中のヴァイオリエストがあこがれる「ストラディヴァリウス」。華麗な音色と豊かな音量に加え外観も美しいことから、美術品としても評価される、なんと数億円の高値がつくこともある名器だ。それだけに偽物もたくさん出まわっている。

ストラディヴァリウスは、17世紀後半から18世紀にかけて活躍したアントニオ・ストラディヴァリが製作したものの。93歳まで長生きした彼は、その生涯でヴァイオリン、チェロ、ビオラなど、約2000の弦楽器を製作したといわれている。とくに、1700年ごろから1720年ごろにかけて作られたものの出来栄がみごとで、史上最高の弦楽器とまでいわれている。

だが、いくら長生きしたとはいっても、ひとりだけでそんなに大量の楽器が作れるはずがない。実は彼には有能な助手がいたのだ。

その助手とはストラディヴァリのふたりの息子フランチェスコとオモボノ。だから、ストラディヴァリ作のヴァイオリンのなかには、実際は息子が作ったものがたくさんあるというわけ。

おまけに、息子たちは父の死後も、ストラディヴァリウスというラベルを貼ったヴァイオリンを作りつづけていた

のだから、現在、残っているストラディヴァリウスの偽物を最初に作ったのは、実の息子たちだということになる。

ただし、こうしたストラディヴァリウスをその他の偽物と同一視していいかどうかはむずかしいところ。洋服や宝石でも、先代のあとを継いだデザイナーが同じブランドで作品を発表することがよくある。ホンモノに限りなく近い偽物といったところかも……。

ちなみに、世界に現存するホンモノは約600本。そのうち日本には30本以上あるといわれている。

### 古代エジプトのロゼッタストーンが大英博物館にあるのはなぜ？

ロンドンの大英博物館には「ロゼッタストーン」と呼ばれる石が展示されている。これは、古代エジプトの石板で、碑文に象形文字とともに古代ギリシア文字が書かれていたことから、古代エジプトの象形文字の一種であるヒエログリフ（聖刻文字）の解読に大きな役割を果たした。いわば考古学上の大発見だったのである。

このロゼッタストーンを発見したのはフランス軍兵士。1799年に遠征中のナポレオン軍の兵士が、アレクサンドリア近郊の小さな村ロゼッタで城塞を修築中に、泥の中から黒い玄武岩の石碑の断片を発掘した。発見者の氏名はわかっていないが、遠征に技師や学者も同行していたことが幸いして、この歴史的発見が見逃されることがなかったのだ。

こうして発見されたロゼッタストーンは、その後、フランスによって占領されたエジプトで保管されていた。ところが、やがてフランス艦隊がイギリス艦隊に全滅させられるとナポレオンは少数の兵とともに本国に戻ってしまう。残ったフランス軍は孤立無援となって、イギリスと講和を結ぶしかなかった。

これが1802年に結ばれたアミアンの和約。これによって、フランスはエジプトを元の持ち主のオスマントルコに返還。このとき、ロゼッタストーンはフランス軍の撤退に立ち合ったイギリスの手に移ってしまったのだ。

そのため、現在は大英博物館に展示されているというわけ。

ただし、肝心の碑文の解読は、世界の研究者がチャレンジしたものなかなかできなかった。そして、とうとう1822年に世界で初めてフランスのシャンポリオンが解読に成功。フランスはイギリスに引き渡す前に碑文の写しを取っていて、何とか解読だけでも成功させたいと必死に努力を重ねていたのだ。

それがみごとに実ったのは、せつかくのお宝を他国に奪われてしまったフランスの執念といえるのかもしれない。

### これぞ「珍兵器」？ 身近にあるこんなものが兵器に早変わり！

戦争なんかないほうがいいに決まっている。だが、残念ながら、人類の歴史は戦争の歴史でもある。古代から現在に至るまで、この地球上では数多くの戦争が行われてきた。

それにつれて武器も進歩した。現代では「ハイテク戦争」。コンピュータを駆使した武器にまで発展しているのだ。

そんな武器の中で、変わった秘密兵器がある。15～16世紀の海戦でヴェネチア海軍が使用した、それは奇妙なものだ。接舷して敵船に乗り移る攻撃を得意とした彼らは、これを敵の船の中にぶちまけては、相手の兵の自由を奪った。じつに有効な武器だったのである。

その武器とは単なる石けん水。石けん水を敵の船にぶちまけると、敵の兵はツルツルと足を滑らせ、とても戦うどころではなくなってしまう。そこに、ヴェネチア海軍が急襲をかけて敵兵をやっつけてしまうというわけ。もちろん、ヴェネチアの兵士たちは足にしっかり滑り止めをつけて突入した。

この石けん水作戦と同時に、ヴェネチア海軍のガレー船は漕ぎ手も市民で、いざとなれば彼らも剣をとって戦った。つまり、それだけ戦闘要員が増えるわけで、これによって両者の兵力の差は歴然。おかげで、ヴェネチア海軍は大勝利をおさめることができたのだ。

ほかにも異色の兵器がある。1841年8月、アメリカのジョン・コウ海軍大尉が指揮するウルグアイ艦隊と、イギリスのウィリアム・ブラウン提督に率いられたアルゼンチン艦隊が戦っていた。戦況は一進一退で、なかなか決着しない。そのうちにウルグアイ艦隊は弾丸がなくなるという大ピンチを迎えてしまう。

弾丸がなくては戦争にならない。それを見透かしたアルゼンチン艦隊は、全速力でウルグアイの艦隊に迫ってく

る。まさに絶体絶命のピンチだ。

そこでウルグアイ艦隊のコウ大尉は思わぬ弾丸を発見した。古くなくてももう食べられなくなったオランダ・チーズが甲板に置きっぱなしになっていたのだ。チーズが弾丸の代わりになるとは思えなかったが、ほかにもう弾丸になりそうなものはない。幸い火薬だけは残っているから、とにかく撃ってみるしかなかった。大尉は兵士たちにチーズの弾丸を撃つように命じた。

その結果、チーズはみごとに敵艦に命中。もちろん、弾丸のように威力はなかったが、奇妙なものが飛んできて粉々に飛び散るのだから、敵は混乱するばかり。おかげでアルゼンチン艦隊は一目散に逃げていく。チーズが一発逆転の秘密兵器となったのである。

## 自由の女神がアメリカに贈られたのにはワケがある？

プレゼントがいつもありがたいとは限らない。なかには、欲しくもないプレゼントをもらってしまうこともある。

ニューヨーク市マンハッタン以南、リバティ島に建てられた「自由の女神」はアメリカのシンボル。そして、内外の多くの人びとが訪れる観光スポットだ。この像はフランス国民がアメリカ合衆国の独立100年を記念して贈ったもの。

1865年、フランス、ヴェルサイユに近い町で開かれた晩餐会で、高名なフランスの法学者で歴史家のエドワール・ド・ラブレーが、若い彫刻家フレデリック・オウガスト・バルトルディと、フランスとアメリカの関係について話し合った。そして、アメリカの独立100周年が近づいていることから、ラブレーはフランスが贈り物をしたいのではないかと提案。バルトルディはそれなら、大きな彫像をつくろうと考えたのだ。

その後、フランスとプロシアのあいだで戦争が起り、バルトルディが召集されるなど計画の実現は遅れたが、ようやく数年後に着手。1874年に、バルトルディがニューヨークに派遣されてアメリカ政府と打ち合わせを行なった。彼が乗った船がニューヨーク港に入港したときに、ニューヨークの入口に巨大な自由の女神像を建てることを思いついたのだ。像のモデルは、賢く気高い母性的な顔を求めて、自分の母親に決めた。

さて、問題の費用だが、フランス側が彫像の代金を支払い、アメリカ側が岩とコンクリートと銅鉄でつくる台座の資金を調達することで合意した。それぞれ国民の寄付でまかなおうとしたのだが、フランスでは市民が現金や小切手を郵送したり、政府が宝くじを発行して利益を資金にあてるなど、最初から順調に資金が集まった。

これに対して、アメリカではあまり資金が集まらなかった。「そんなものをもらう必要があるの?」「なんで贈り物をされるのにお金を払う必要があるの?」といった声が国民のあいだで強かったのだ。

有名な新聞社主のビューリツァーは、ニューヨークのお金持ちが私生活のぜいたくのためには金銭を浪費しながら、像の台座に寄付するように求められたわずかな金額をケチる風潮を激しく非難した。そうした声が高まり、ようやく合計27万ドルの寄付が集まったのだ。

こうして当初の予定より10年遅れた1886年、アメリカのシンボル「自由の女神」が完成したのである。

## 「テディ・ベア」とアメリカ大統領の不思議な関係

世界的に人気のクマのぬいぐるみ「テディ・ベア」。日本でも、かなりのプレミアがつくお宝モノまで登場している。

実は、テディ・ベアは、アメリカ第26代大統領、セオドア・ルーズベルトのニックネームから名付けられた。彼は、トラストを抑え、日露戦争の講和を斡旋、モロッコ問題を解決した有能な政治家である。

しかし、そのネーミングの経緯となると2説あり、テディ・ベアを最初に作ったのは、アメリカのモリス・ミヒトム、または、ドイツのマルガレーテ・シュタイフといわれるのである。

ルーズベルト大統領は私生活では狩りが好きだったようで、暇を見つけてはクマ撃ちに出かけるほどであった。1902年、ルイジアナ州で狩りをしたとき、5日たっても1頭のクマも現われず、地元では大統領を喜ばせるために、あらかじめ捕獲しておいた子グマを放したのである。

しかし、ルーズベルトは喜ぶどころか、すっかり気分を害してしまった。というのも、生後間もない子グマは母グ

マといっしょに行動するのがふつう。それが単独でうろついていたということは、あらかじめ捕獲しておいたものだと見抜いてしまったからである。クマ狩りの魅力は野生のクマを倒すこと。人間が放した子グマを撃ってもおもしろくないというのだ。

結局、彼は狩りを取りやめて帰ってしまった。この話が新聞に報じられると、彼は子グマをかわいそうに思う、動物愛護の精神を持ったりつばな大統領ということになった。

そして、この美談に目をつけたのが、ニューヨークのモリス・ミヒトム夫妻のアイデアル・トイズという玩具会社。クマのぬいぐるみに大統領のニックネームである「テディ」という名札をつけて売り出すことにした。これがたちまち大ヒット。こうしてテディ・ベアは世界一有名なクマになったという。

一方、ドイツではオリジナルのテディ・ベアは、もともとマルガレーテ・シュタイフという女性が作り出したものと主張している。これを気に入ったアメリカの卸商が3000個のクマを注文。そのうちのいくつかが、たまたま大統領が出席した結婚式のテーブルを飾るのに使われた。それで、テディ・ベアといわれるようになったというのである。

どちらの説が真実かは不明だが、テディがルーズベルト大統領であることは間違いない。

### 死後3日で建てられた「レーニン廟」が意味するものとは？

ロシア革命において中心的な役割を果たし、その後ソビエト政府首班として社会主義建設を指導したレーニン。その遺体はいまも観覧することができる。

レーニンが亡くなったのは1924年1月21日。彼の死からわずか3日後に、アレクセイ・シュージェフの手によって最初のレーニン廟の建造が始まっている。まるでピラミッドのような立方体をしているが、これは「立方体は永遠。立方体からはすべての建築学的創造の多様性が生まれる」という理由によるもの。

また、わずか3日という短時間で建設されたのは、19世紀末のキリスト教思想家ニコライ・フョードロフが唱えた復活の大事業に通じる何かがあったといわれている。建設の中心となった外国貿易人民委員のレオニード・クラーションが、死者の物理的復活を唱えるフョードロフの哲学の熱烈な信奉者だったからだ。中世ロシアでは、受難の日から復活の日の朝までに教会を一举に建ててしまう事業を、フョードロフみずからが復活の事業の見本と考えていた。クラーションはこれに影響されて、たつた3日でレーニン廟を建設しようしたのではないかと考えられている。

その後、1929年には現在の赤土色をした花崗岩造りの現在のレーニン廟に建てかえられた。そこに置かれたガラスケースの中には、完全に防腐処理をされたレーニンの遺体が安置されている。その姿はまるで生きているかのようで、そのため当初は「レーニンは生きている！」というウワサが広まり、事態を重く見た政府があらためてレーニンの死を宣言したほどだったという。

ところで、レーニンの死には謎が多い。晩年の彼は重い脳障害を病み、外国から呼び寄せられた医師や側近たちの献身的な治療と介護を受けていた。そのかいなく病死したわけだが、これに疑問を持つ人もいる。レーニンはスターリンに毒殺されたという説があるのだ。それを裏づけるような文書も紹介されている。

また、銃弾がつけた傷が病状悪化の原因だという説もある。レーニンはかつて暗殺未遂事件にあい銃弾を浴びたことがある。そのときにできた傷が徐々にしこりをつくり、持続的に頸動脈を締めつけて脳への血行不全をもたらしたというのだ。

ちなみに、このときに銃弾の傷がなかなか回復しなかったのは、梅毒が原因だったという説もある。しかし、検査の反応は陰性だったといわれ、詳しい真相はわかっていない。

偉大な人物だけに、その死がいろいろな憶測をされるのはしかたないところだろう。

1920年代、禁酒法時代のシカゴの暗黒街に君臨したアル・カポネ。直接、殺しただけでも数十人、暗殺指令は400件を超え、「闇の帝王」とも呼ばれた。

だが、その犯罪はなかなか立件できなかった。ようやく1931年に逮捕されたのは脱税容疑で、懲役11年と罰金付きの判決だった。

しかし、刑務所に入れられたカポネは、それまでのワルさがウソのように模範囚になった。刑務官には反抗しないし、囚人のストライキにも参加しない。あまりにおとなしいために、ほかの囚人の反感をかってハサミで刺されるといふ事件まで起きている。

なぜ、カポネはそれほどまでに模範囚に徹したのか。それはとにかく早く出所したかったから。といつても、ボスの座に返り咲くためではない。愛する妻や子どもたちと過ごすためだ。そのおかげで刑期は短縮され、1939年の冬、カポネは出所した。もちろん、余生を家族とともに過ごしたことはいうまでもない。



## 世界史をめぐる素朴な疑問

### ギザでもっとも大きなピラミッドはクフ王のものではない？

エジプトにはたくさんピラミッドがある。そのなかでも有名なギザのピラミッド。

クフー、カフラー王、メンカウラー王の3人の王が建てたといわれている。

そのうちでもっとも大きなのがクフ王のピラミッドだ。フィレンツェやミラノの大聖堂、ローマのサン・ピエトロ大聖堂、ロンドンのセント・ポール大聖堂やウエストミンスター寺院などをすべて合わせても、クフ王のピラミッドに納まってしまうといわれるほどの巨大なピラミッドだ。おまけに、構造も堅固で、最初に中に入った考古学者たちは、火薬を使ってトンネルをくりぬいて内部を調べたが、それでも崩れなかったという。

さて、そのクフ王のピラミッドは、紀元前2550年ごろに建てられた王の墓だといわれている。だが、この説に疑問を唱える考古学者は多い。なにしろ墓なら当然あるはずのミイラが見つかっていないのだ。

このピラミッドがクフ王のものだといわれるようになったのは、1837年にピラミッドの内部で、クフ王の名まえを含む短い碑文が発見されたため。だが、あとになってヒエログラフがさかさまだったり、文法が間違っていたことがわかった。おまけに、発見者のイギリス大佐の助手が赤いペンキを持って中にはいるのを見た！ という重大な証言まで飛び出したのだ。

もしもこれがほんとうなら、碑文は捏造されたもので、ほんとうはなかったことになる。

碑文もなく、ミイラもないのに墓だというのはかなり強引な結論だ。

このため、じつはこのピラミッドは、エジプトで最高の神として崇拜されていた女神イシスの神殿だという説も登場している。しかし、定かではない。

「クフ王のピラミッド」と呼ばれている建造物は、誰が何の目的で建設したのだろう。それは、いまだに解明されない大きな謎なのである。

### 農閑期の失業対策だった？ エジプトのピラミッド建設

古代の権力者がつくる巨大な建造物。といっても、実際に建設にあたるのは多くの民衆だ。しかも、そうした人びとは、本人が望みもしないのに強制的に連れてこられて、苛酷な労働を強いられているイメージがある。だが、実際にはそうとは限らないようなのだ。

有名なエジプトのピラミッド建設にも多くの民衆が参加した。しかも、それは奴隷を中心とした過酷な強制労働だったというのが定説になっていた。ところが、最近になって、そうした説が覆されつつある。

たとえば、アスワンなどの石切り場で労働者のいたずら書きと思われる遺物が発見されている。そこには、王に対する恨み、つらみなどはほとんどなく、それよりも王を称賛したり、生活の喜びをうたったものが多かった。とても過酷な強制労働の最中に書かれたものとは思えないのだ。

また、こうした労働に対して、ダイコン、タマネギ、ニンニクなどが支給され、衣食住が保障されていたことも記録されている。なかには、「ピラミッド建設中、誰ひとりとして疲れ果てることも、ノドが渇くこともなかった」という記録さえ残っている。

労働力の中心だったといわれる奴隷にしても、有名なクフ王のピラミッドが建設された当時は、そんな制度は存在しなかった。ずっと時代が下った新王国の時代になって初めて奴隷が生まれたのだ。

こうしたことから考えて、最近ではピラミッド工事は一種の農閑期の失業対策になっていたのではないかとされている。

ピラミッド建設に参加したのは奴隷ではなく、国民の大部分を占める農民。しかも、その工事の多くは、ナイル川の氾濫によって農作業のできない農閑期に行なわれた。その間、衣食住の心配なく仕事ができるピラミッド建設は、農民にとってありがたい仕事だったというわけだ。また、建設を通して習得した技術などは、仕事を終えて自分の村

に帰ったときに大いに役立つ。農民にとっては、まさに、一石二鳥どころか、三鳥にも、四鳥にもなりうる事業だった可能性があるのだ。

同時に、王に対する不平、不満が出なかった背景には、当時の民衆のあつい信仰心がある。古代エジプト社会では、国王は太陽神ラーの子として死後は神となって永遠の命を持つと考えられていた。その国王の「永遠の家」であるピラミッド建設に従事することは、太陽神ラーのご利益に預かれるありがたい事業だったわけだ。

### 当時は受け入れられなかった？ 孔子の儒教思想

古代中国の思想家として知られる孔子は、周の末期に周王の支配下にあった諸侯が勢力を持つようになった春秋時代に活躍。その思想は現在の社会にも大きな影響を与えている。

有名な司馬遷の『史記』によると、孔子が生まれたのは魯の国。母を幼くして亡くし、苦学のすえに下級官吏になったが、それに満足できずに仕事を辞めて諸国を放浪。だが、どこの国でも自分の思想を生かせるような官職が得られずにふたたび魯に戻り、弟子の育成に情熱を注いだ。

それでも、政治への思いは強かったようで、その後は政治家となって建設大臣を経て紀元前499年には司法大臣に就任。貴族階級を押さえて、「仁」を身につけた「君子」が政治を行なうことを目指した。「仁」とは自己も他人も、お互いの人格を認めて自分を犠牲にしてでも他人のために尽くすことだが、この考え方は貴族たちの反発を招いて、彼は失脚してしまう。

その後、弟子たちとともに魯を去った孔子は、14年間にわたって諸国を遍歴し、自分の考えを説いて回った。だが、彼の考えはなかなか受け入れられなかった。ほとんどの国で冷たく扱われ、騒乱にあつて命を落としそうになることさえあった。その旅の苦しさはのちに弟子たちが彼の思想をまとめた『論語』にも表われている。

晩年の彼は、弟子たちの教育に力を注ぐとともに、『詩経』や『書経』といった古典を整理し、魯の国の歴史を通して「義」を明らかにしたとされる『春秋』を執筆した。だが息子を亡くし、後継者とも思われた顔淵を亡くし、お気に入りだった子路も戦死してしまうなど、不幸がつぎつぎに彼を襲う。そして、自分が死んだあとに自分の学問がどうなってしまうのか不安でたまらなくなり、「我れを知る者は其れ天か」といって、自分を慰める毎日を送ったのち、紀元前479年に74歳でこの世を去ったのだ。

だが、どうやら彼の不安は取り越し苦労だったようだ。孔子の儒教思想はその後も受け継がれ、多くの人びとに影響を与えた。孔子の名も当初は『春秋』の著者として知られていた程度だったが、いまでは知らない人がいないほどの存在だ。

これは、彼の弟子たちが優秀だったことが大きいといわれている。いくらりつばな思想でも、それを語り継いで世に広める弟子がいなければ消滅してしまう。孔子の思想が3000年の歴史を生き延びて、現代にまで受け継がれているのは、優秀な弟子たちのおかげといってもいいだろう。

### 万里の長城を築いたのは秦の始皇帝ではない？

中国が誇る世界的な歴史遺産の万里の長城。東は河北省山海関から西は甘肅省嘉峪関に至る、長さ約2400キロといわれる大城壁だ。地球の軌道を回る宇宙船からも、その映像がはっきり認められるというから、とんでもなく規模の大きな建築物。世界最大の建造物ともいわれている。

その万里の長城を築いたのは秦の始皇帝、というのは広く知られている話。ところが、正確にはこれは正しくない。

始皇帝が中国全土を統一するまでは、中国各地には多くの群雄が割拠し、激しい勢力争いを展開。なかでも、斉・楚・燕・韓・趙・魏・秦という7つの国が大きな力を持っていた。これらは「戦国の七雄」と呼ばれ、周辺の中小勢力を自分の国に組み入れながら、ほかの国からの侵略を防ぐために、土塁を築いたり濠を掘ったりして独自の「長城」をつくっていた。

そんなときに登場したのが始皇帝だ。13歳で即位し、10年後には実父ともいわれる呂不章を退けて親政をスタート。抜群の指導力とすぐれた戦術で他の国をつぎつぎに破り、自分の領土にしていった。紀元前221年には中国史

上初の統一国家を実現。郡県制の施行、度量衡や文字・貨幣の統一、言論・思想の統制などの中央集権を推し進めた。

こうした統一国家形成の過程で、領土とともに各国が築いた長城も始皇帝のものとなった。始皇帝はそれを補強したり、いらぬものは壊したりして、統一的な大城壁につくりあげていった。もちろん始皇帝自身が築いた城壁もあるが、それはごく一部。こうして、当時の秦にとって強敵だった北方民族の侵入を防ぐ強大な城壁が完成したのだ。その後、万里の長城は漢の武帝によってさらに延長された。

ただし、現存している万里の長城は、隋代にさらに南に再建されたものを明代に修復したものだといわれている。宇宙から撮影した映像で見ると、現在の万里の長城はちょうど「コ」の字の形をしているが、これは始皇帝がつくったものではない。始皇帝がつくったものは、それよりもさらに北に位置していたもので、しかも高い城壁ではなくて土塁を中心にしたものだったといわれているのだ。

いわば始皇帝は、万里の長城の建設者ではなく改修者というわけ。他人がつくったものを改修しただけで、まるで自分だけの功績のようにいわれてしまっているのだから、これほどオイシイ話はないかも？

## 中国の歴史を左右した「宦官」には誰がなった？

中国の歴史で大きな役割を果たしたのが「宦官」。官廷に仕える去勢した男性で、その存在は古代エジプトですでに確認されていて、ペルシアやギリシア、ローマの歴史にもひんばんに登場している。

そんな宦官には、いったいどんな人がなったのだろうか。

まず多かったのが、口減らしのために売買されたり、誘拐された庶民の子どもが去勢されて官廷にはいるケース。子どもにとってはたまったものではないが、貧しい地方の人びとが富と権力を手に入れるためには、こうして男性としての機能を捨てることぐらいしか方法がなかったのだ。

また、異民族の捕虜を去勢するケースも多かった。匈奴のような北方遊牧民族とつねに緊張関係を保っていた漢民族は、彼らを従わせるために去勢という方法を用いた。ちょうど、荒馬を去勢することで、おとなしく従順な使役馬にするのと同じようにしたわけだ。

そのため、殷代以来、宦官の多くは去勢された異民族の捕虜だった。

さらに、漢代以降に急増したのが犯罪者を去勢する「宮刑」による宦官。周代以来中国には入れ墨、鼻切り、足切り、宮刑、死刑という五つの刑罰があった。どれも、現代から見れば残酷な刑だが、さすがに死刑には抵抗があったのか、漢代には「罪一等を減じる」という名目で、死刑を減らして宮刑を増やした。そのため、「史記」で知られる司馬遷をはじめ多くの去勢者が現れ、官廷に入って宦官になった者も多かったのだ。

その後、宮刑は隋になって廃止された。そのため、唐では民間で勝手に去勢した人間を献上させることにした。その供給地になったのが、福建、広東、広西といった嶺南の地。

そうした土地の人びとを中心に、庶民は宦官になることによって富と名誉を手に入れようとした。

ただし、こうした宦官の多くは教養もなく、君主にとっては扱いやすい存在だった。

司馬遷やインド洋からアフリカ東海岸まで大遠征をした鄭和、紙を発明した茶倫などの有能な人材はほんの一握り。そのため、君主は宦官を大いに利用したが、それが逆に宦官の勢力を増大させることにもつながり、なかにはやりたい放題に権力をふるう宦官も登場したわけだ。

ちなみに、宦官が日本に輸入されなかったのは、日本では海に囲まれて異民族との接触、征服がなかったためだとされている。日本の男性にとっては幸いだったかもしれない。

## 「チンギス・ハン＝源義経」といわれている理由とは？

歴史には数々のヒーローが登場する。平安末期の武将である源義経（1159～1189）もそのひとりである。幼名は牛若。7歳で鞍馬寺に入り、次いで陸奥の藤原秀衡のもとに身を寄せたが、1180年に兄頼朝の挙兵に応じて木曾義仲を討ち、さらに平家を滅ぼした。だが、頼朝とのあいだに不和を生じて、追われる身となる。そして、ふたたび秀衡のもとに身を寄せたものの、秀衡の死後、その子泰衡に急襲され、衣川の館で自殺。その悲劇の一生は

テレビや舞台などで取り上げられおなじみだ。

その義経について昔からいわれているウワサが、「チンギス・ハン＝源義経」伝説。つまり、義経はじつは生き延びて、蝦夷（北海道）に渡り、そこからさらに樺太を経て満州、モンゴルへと足を延ばし、あの有名なモンゴルの覇者チンギス・ハン（1167～1227）になったというのだ。

いったいなぜこんなことがいわれるようになったのだろうか。まず、ふたりが生きた時代がだいたい同じであること。そして、チンギス・ハン「源義経」の音読みである「ゲンギケイ」によく似ているというのが、この説の根拠になっている。これをもとに、義経が通ったとされる地名や遺跡は、彼に關係した名称になっているともいわれる。たとえば、沿海州のオリガー湾の近くにある「ハングワン」は、義経の職名である「判官」からきたもの……という具合だ。

また、モンゴルが用いていた旗の白色は、源氏の白と共通する。さらに、チンギス・ハンの後裔である清王朝の国号は、清和源氏にちなんだものだという説もある。

こうして見てくると、伝説が真実に思えてくるが、じつはそうとばかりはいいきれない。「チンギス・ハン＝源義経」伝説が固まったのは17世紀後半のこと。あまりにも悲劇的なその末路に同情した人びとが、「義経はどこかで生きているにちがいない」と自分を納得させるうちにこうした伝説ができたのではないかというのだ。

さらに、明治時代以降、日本が大陸に進出しようするうちに、これを正当化しようとする人たちが、この義経伝説を利用し、義経のように中国大陸に渡って活躍する夢を国民に植えつけようとした。どんどん伝説は有名になり、とくに満州事変で日本がモンゴルを侵略しようとしたときには、盛んに流布されるようになった。権力者たちが意図的に広めた「チンギス・ハン＝源義経」伝説ではなかったのだろうか。

## コロンブスの悲愴な最期。新大陸はなぜ「アメリカ」になった？

アメリカ大陸を発見したコロンブスは、1451年にイタリアに生まれた。1492年に航海に出かけ、バハマ諸島の中のひとつの島（サン・サルバドル）に到着。彼はここをインドの画だと勘違いしたため、西インド諸島と呼ばれるようになった。その後はキューバ、ハイチに到達。1494年にジャマイカ、1498年に南アメリカ北部、1502年に中部アメリカに到達するなど、ヨーロッパ人にとつての新世界を切り開いていく。

ところが、そんな彼の晩年は不遇だった。第2回目の航海では、金鉱労働に駆り出された原住民の不満が爆発し、反乱が起きた。また、第3回目の航海でも、コロンブスの支配に反発する人びとの反乱にあつて、統治能力を疑われた彼は訪れた査察官によつて鉄鎖をつけられ、本国に送還されるという屈辱的な体験までしている。彼を信頼し、最初の航海を実現する原動力にもなつてくれたスペイン女王イサベルも1504年すえに死亡。失意の中で、健康を害したコロンブスは1506年に亡くなった。

こうしてコロンブスの影響力は衰え、しだいに忘れられた存在になつていった。有名なドイツの地理学者マルティン・ヴァルトゼーミュラーが1507年に出版した『世界地誌入門』の中には、南米大陸の発見者としてコロンブスではなくアメリゴ・ヴェスプッチという名まえが記されている。彼は1501年に南アメリカの大西洋沿岸を航海したが、さすがに商人出身らしく、自分を売り込むのが得意だったようだ。自分の航海の様子をあちこちで話し、それがヴァルトゼーミュラーにも伝わり、コロンブスの代わりに彼の航海が収録されたというわけだ。

ヴァルトゼーミュラーは、新しい南方の新大陸にヴェスプッチの洗礼名アメリゴをラテン語化した「アメリカ」という名まえをつけた。のちに、ほんとうの発見者がコロンブスだとわかつたときにはもうあとの祭。こうして新大陸の名は「アメリカ」になったのである。

## タージ・マハル建立はイスラムとヒンドゥーの共存策？

インドの有名なイスラム教の墓廟「タージ・マハル」は、ムガル帝国の第五代皇帝シャー・ジャハーンによつて、1632年から20年以上の歳月をかけて建立された。白大理石の壮麗な姿は、現在でも多くの観光客を引きつけているが、人気を集めている理由はほかにもある。「世界最大の愛の記念碑」といわれるように、美しい夫婦愛が込めら

れた墓廟なのだ。

シャー・ジャハーンには最愛の妻ムムターズがいた。ひと目ばれで結婚しただけに、シャーはムムターズをだいにし、ムムターズも典型的な良妻賢母として夫に尽くした。まさに相思相愛のふたりだったのだ。

ところが、やがて悲劇が起きる。1631年、シャーの遠征に同行したムムターズが、14回目のお産を終えた直後に亡くなってしまったのだ。シャーは一夜で髪が真っ白になってしまうほど激しいショックを受けた。そして、彼は亡き妻をしのぶために、イスラム世界各地から建築家や芸術家を集めて霊廟タージ・マハルの建設に着手したのだ。

ムムターズ亡きあとシャーは再婚もしないで、やがて皇位継承をめぐる争いで城に幽閉されると、亡き妻を思って涙して暮らしたという。なんとも美しい夫婦愛だ。

ところが、なんと世界的に有名なこの愛の物語に、異論が出されている。イスラム教徒にとって、墓は最後の審判を待つあいだ仮の眠りにつく場所。それなのに、いくら最愛の妻でも、あんなに豪華な墓をつくるのはおかしいというのだ。

そうした疑問に答える形で、タージ・マハルの建設には、夫婦愛以上にムガル帝国の皇帝としての計算が働いていたという説が登場している。

シャー・ジャハーンは、オスマン・トルコ帝国とサファヴィー朝ペルシア帝国に対抗するために、インドで多数を占めるヒンドゥー教徒との共存策を捨てて、イスラム化を強力に推進。ヒンドゥー教寺院を破壊したり、イスラム教徒とヒンドゥー教徒との結婚を禁止した。だが、こうした政策はヒンドゥー教徒の反発を招くばかり。そこで、穏やかにイスラム化を進めるために、夫を愛し、つねに良妻賢母としてふるまったムムターズをシンボルに据えたタージ・マハルの建設に着手した。つまり、人びとの心をつかむ戦術に亡き妻を利用したというのである。

はたして、真相はどのようなだろう。美しき夫婦愛の物語だと考えるほうがロマンチックなのは確かだが、.....。

## ロシアには「ヒゲ税」とっていた皇帝がいた？

似合いもしないのにヒゲを生やしている人を見ると、思わず「ヒゲを生やす人から税金を取れ！」などといったくなるが、かつてロシアでは実際にそういうことがあったというのだ。

1682年にロシア皇帝に即位したピョートル大帝は、内政、外交、宗教、教育、軍事など、さまざまな面で改革を行なった。その根底にあったのは、ロシア人の意識改革を行なうことだったといわれている。

その一環として行なわれたのが、西欧文明の積極的な導入。これまで貴族たちが着ていたロシア独特のカフタンという長上着を禁じて、サクソニアかフランス風の着にチョッキの着用を義務づけた。

また、当時、ヨーロッパではヒゲを軽く見る風潮があり、ヨーロッパを視察して帰国したピョートル大帝は、ロシアでもヒゲを生やす風習をなくそうと考えた。

そして、自分でハサミを持って貴族たちのヒゲを切って回ったのだ。一般の国民に対しても、聖職者と農民以外はアゴヒゲを生やすことを禁止。違反者にはアゴヒゲ税を課して徹底しようとした。

だが、この改革は、彼の思うようにははかどらなかった。宗教心のあついロシア人にとって、アゴヒゲを生やすことは主イエスの姿に似せるための神聖な行為であって、そう簡単にやめるわけにはいかなかったのだ。

こうして、多くの国民がヒゲ税に対して反発。エカテリーナ1世がピョートル大帝の法令をさらに強化したが、これもまた失敗し、エカテリーナ2世の時代になってこの法律は廃止され、ふたたび自由にヒゲを生やせるようになったというわけ。

ところで、いくら西欧化のためとはいえ、ヒゲに税金をかけることを思いついたピョートル大帝はかなりユニークな人物だったようで、身長2メートルの巨漢。形式ばったことが嫌いで宴会ではナイフやフォークを使おうとしないで、肉料理を手づかみで食べたり、ウォッカをがぶ飲みするという大胆さ。

それが人間臭いと評判になったものの、教会の権威を低めようとする皇帝はアンチ・キリストとみなされ、民衆の失望を失ったという。

また、ヨーロッパ視察で、早い時間から深酒したり、バカ騒ぎが好きだったことが、ヨーロッパの人びとを驚かせたようだ。



## 「パンがなければお菓子を食べればいい」の誤解

日本では、「貧乏人は麦を食え」といった首相がいた。庶民の窮状を知らない高飛車な権力者の発言としてよく例に出されるが、かつてのフランスでも同じような発言が権力者の口から飛び出したことがある。

その権力者とはマリー・アントワネット（1755～1793年）。フランス王ルイ16世の妃で、フランス革命の際、ギロチンで処刑された彼女は、かなりの浪費家で、ワガママな女性だったといわれている。

1789年10月、パリではより公正な新政府をルイ16世につくらせようとして、貧しい女たちがベルサイユ宮殿に向かって行進をした。しかしそのとき、人びとがパンもなく飢えていると聞いたマリー・アントワネットは、こういった。

「パンがなければ、お菓子を食べればいいでしょう」

この話は王妃の処刑後あつという間に広がり、彼女の浪費グセや軽はずみで無責任な言動の例としてたびたび引き合いに出されてきた。

だが、どうもこの話は正確ではないらしい。

ある説では、彼女がそうした言葉を吐いたのは、当時のフランスの法律が関係していたという。もし、パン屋にパンがなくなれば、パンより値段の高いお菓子類を同じ値段で売らなければならないという決まりがあった。彼女は単にパン屋にそれを促したにすぎないというのである。もしも、これがほんとうなら、彼女は高飛車どころか、庶民の強い味方ということになる。

また、別の説では、彼女の発言として取り上げられたこの言葉は、1760年代にフランスの作家で啓蒙思想家のジャン・ジャック・ルソーの著書『告白録』の中に、すでに登場しているという。このとき、マリー・アントワネットはまだ少女。つまり、少なくとも彼女が初めていった言葉ではないわけだ。

しかも、この言葉の中の「お菓子」とは最上級のパンのこと。彼女はさすがに高貴な身分だけに、パンといえば最上級のこのパンしか知らなかった。したがって、この言葉は実際には庶民に対する親切心の表われだったというのだ。

はたして、どちらの説が正しいのか、あるいはどちらも正しくないのか、真相は不明だが、彼女がこのような発言したという証拠がどこにもないのはたしか。彼女に対する悪いイメージがくり上げた言葉といえるかもしれない。

## アメリカ大統領官邸が「ホワイトハウス」と呼ばれる理由

アメリカ大統領官邸「ホワイトハウス」は、首都ワシントンD C北西区、ペンシルベニア通り1600番地にある。

地上4階、地下2階、東西50メートルの白亜の建物は、イギリスのバッキンガム宮殿やロシアのクレムリンなどにくらべるとはるかに小さい。しかも、これでも改築を重ねるうちに大きくなったもので、1792年に起工された最初は、木造2階建てで、50室程度の小さな建物だったという。初期の建物を訪問した英国の作家チャールズ・ディケンズは「まるでイギリスのクラブハウスようだ」といつている。設計したのは、懸賞に当選したアイルランド生まれの建築家ジェームス・ホバン。落選した応募者の中には、のちに第3代大統領になったジェファソンもいたという。

この建物に最初に入居したのは1800年、第2代大統領のジョン・アダムズとアビゲイル夫人だった。だが、「ホワイトハウス」という名称は、最初からついていたものではない。最初は単純に「プレジデント・ハウス」「プレジデント・マンション」「プレジデント・パレス」などと呼ばれていたらしい。

それがホワイトハウスと呼ばれるようになったのは、1814年8月、第4代のマディソン大統領のときに英国軍が首都ワシントンを攻撃したのがきっかけ。英国軍は大統領官邸にも火を放ったために内部が焼け落ちてしまった。その修理の際に、内部を真っ白に塗ったため、修復後にホワイトハウスと呼ばれるようになったのだ。

ただし、建築当初から、バージェアで採れる灰白色の石灰岩で造られた建物が周囲のレンガ造りの建物と対照的だったため、そう呼ばれていたという説も一部にはある。



これが正式な名称になって、レターヘッドにも使われるようになったのは、1902年のセオドア・ルーズベルト大統領のときのことだ。

現在のホワイトハウスは、大統領の執務室をはじめ、居住室、国賓などを迎える公式宴会場などたくさんの部屋がある。アメリカの政治の中枢だけに警備も厳重で、ゲートは車で突っ込んでも壊れないほど頑丈なものになっている。

だが、それでもほかの国に比べれば開放的で、一部を見学者のために公開している。日曜と月曜を除く毎日朝2時間は見学希望者が東門からはいって、東館と本館の地下1階の一部を見学し、正面玄関からベンシルベニア通りに出ることができるようになっている。

さすがに民主主義の国といわれるだけのことはある配慮だ。

## 情報戦で富を得た？ ロスチャイルド家勃興の裏話

現代は情報化社会。いかに早く情報を入手しそれをうまく利用するかが、成功のポイントになる。世界の金融王と呼ばれるロスチャイルド家も、いち早く情報を入手することによって、巨万の富を築いてきた。

1815年6月、世界の金融の中心地ロンドン証券取引所は、エルバ島を脱出して捲土重来を期すナポレオン軍と、イギリスのウェリントン卿率いる連合軍との決戦の行方を注視していた。いわゆる「ワーテルローの戦い」である。なぜなら、イギリスの代表的公債であるコンソール公債が、ナポレオンが勝てば暴落し、ウェリントンが勝てば暴騰するからだ。

そんななか、ロスチャイルド家のネイサンは、ベルギーから運ばれてきたオランダの新聞をいち早く大手した。ヨーロッパじゅうに構築されたロスチャイルド家の強固なネットワークを活用したのだ。そこには、ナポレオンの敗北が大きく報じられていた。

ネイサンはさっそく取引所に出向いて、暴騰確実のコンソール公債を買うどころか、わざわざ大量に売りに出した。これを見た人びとは「ロスチャイルド家はナポレオンが勝ったという情報を得たにちがいない」と確信した。そこで、われ先にとコンソール公債を売却。

そのため、公債は大暴落したのだ。

だが、これこそがネイサンの狙いだった。コンソール公債が暴落した瞬間、彼はいつきに大量買いに転じた。ナポレオンの敗北が報じられたのはその直後。それによって、公債はいつきに暴騰。ネイサンはわずか数時間で巨万の富を獲得することに成功したのだ。

この、誰よりも早く情報を入手できたロスチャイルド家のネットワークの強固さは、ナポレオン戦争後にも大きな威力を発揮した。

ネイサンは公債の暴落を招かないために、戦争中からの宿敵関係にあったフランスとオーストリア間の平和維持に重大な関心を寄せた。そのため、飛脚や伝書鳩、帆船などありとあらゆる手段を利用して、情報を収集していた。ときにはオーストリア宰相のメッテルニヒが検閲を行っていたのを利用して、フランス王がメッテルニヒについてお世辞で語った言葉を飛脚に運ばせ、わざと捕まらせるという手の込んだ細工もしている。それを聞いたメッテルニヒが喜んで、フランスとオーストリアとの関係が悪化しないように工夫したわけだ。

まさに情報化社会を先取りしたロスチャイルド家。大財閥になるのは当然のことだろう。

## あまりにも有名なリンカーンの演説は別人によってつくられたもの？

政治家の演説には名演説が多いが、そのなかでも有名なのがアメリカ大統領リンカーンが1863年に行なった演説だ。

南北戦争で北軍の勝利を決定づけた「ゲティスバーグの戦い」の4カ月後、リンカーンは、国立戦没者墓地奉獻の式場で、北軍の兵士たちの活躍をたたえて演説した。

「87年前、われわれの父祖たちは、自由の精神に育まれすべての人は平等につくられているという信条に捧げられた、新しい国家を、この大陸に打ち建てた」という一文に始まり、人間の自由を証明する使命を持つアメリカのため

に身を捧げなければならないと説くこの演説のハイライトは例の名文句「人民の、人民による、人民のための政治」で締めくくられている。

ところが、リンカーンのオリジナルだと思われたこの言葉が、じつはずつと昔の記録に残っていたのだ。イギリスの宗教改革家ジョン・ウィクリフが1380年に出した旧約聖書の序文には、リンカーンと同じ「人民の、人民による、人民のための政治」という一節がある。

もちろん、リンカーンよりずっと前だから、こちらのほうがオリジナル。なんとリンカーンはあの名文句を自分で考え出したのではなく、ウィクリフの言葉を引用しただけだったのだ。それも、直接引用したのではなくて、ユニテリアン派の牧師、セオドア・パーカーが著書に引用したものをさらに引用したといわれている。

だが、有名になったのはリンカーンの演説のほう。なんだか人のフンドシで相撲をとったような印象もあるが、それだけ彼の演説がすばらしかったのだろう。ウィクリフにしろ、パーカーにしろ、リンカーンが引用しなければ、これほど有名な言葉にはならなかっただろうから、よかったのかも？

## 42・195キロのマラソンの距離はだれが決めたのか？

マラソンの距離は42・195キロ。これは、紀元前490年にマラトンの戦場からアテナイまで、自軍の勝利を知らせに走った古代ギリシアの伝令に由来するもの、というのが一般に知られた説だ。

だが、この説に基づいて設定された最初のコースは24マイル（約38・623キロ）。1896年にアテネで行なわれた最初の近代オリンピックで設定されたもので、それから25年間はだいたい25マイル（約40・233キロ）前後に設定されていた。

ところが、1908年のロンドン・オリンピックではちょっとちがった。当初のコースは都心のウィンザーからホワイトシティ・スタジアムまでの約26マイル（約41・842キロ）となる予定だったが、当時のアレクサンドラ王妃が「自分はスタジアムのロイヤル・ボックスで見たい。子どもや孫にはウィンザーでのスタートを見せてやりたい」といいたしたからだ。そして、スタート位置をウィンザー城の芝生の上まで延長させてしまったのである。

この結果、マラソンコースは385ヤード（約352メートル）長くなり、これが1921年に、国際陸上競技連盟によって正式なマラソンの距離に決められた。

つまり、女王の気まぐれのおかげで、現在のマラソンの距離が決まってしまったというわけなのだ。

ちなみに、このときのマラソンでは、イタリア人選手が先頭でスタジアムに入ってきたものの、体力の限界で何度も倒れ、最後は同僚の選手たちに引きずられてゴール。自力で走り切らなかったため失格になったが、健闘をたたえたアレクサンドラ王妃が金杯を贈るというエピソードも残った。

しかし、自分のワガママで距離を延長させてしまったのだから、このぐらいいの気配りは当然のことだったかもしれない？

## 2回も売られた？ パリのエッフェル塔

パリの観光名所として知られるエッフェル塔。それがなんと「売却」されたことがあるという。それも2回もだ。事件の主人公は20世紀最初の詐欺師といわれるヴィクトール・ルースティッヒ。1890年にのちのチェコスロヴァキアのホスティンに生まれ、いくつかのたらめな取引を行ない、1920年ごろにフランスから逃亡してアメリカに渡った。

その彼がアメリカで目にしたのが「エッフェル塔が老朽化して、修理が必要だ」という新聞記事。そこで彼はアメリカで知り合ったワル仲間のコリンズとともに大急ぎでパリに戻った。そして、金属スクラップ業者を集めると、自らを通信省長代理と名乗って、こういったのだ。

「政府はエッフェル塔の修理があまりにも高くつきそうなので、頭を痛めている。そこでエッフェル塔を取り壊して、スクラップとして売却することに決定した」

エッフェル塔を解体すれば、少なくとも7000トンの良質な鉄材が手にはいる。業者がこのチャンスを見逃すはずがない。

それを見透かしたルースティッヒの巧妙な作戦だった。彼は、それぞれの業者に見積書を提出させた。

数日後、彼はある業者に連絡した。

「あなたの入札が最高額だったので、政府はあなたの入札を有利に扱うだろう」

そして、同時に暗に賄賂を要求した。業者はすぐに理解して10万ドルを超える札束を渡したのだった。

それを手にしたルースティッヒとコリンズは、予定どおりすぐにウィーンに高飛びした。

ところが、新聞に彼らの犯罪の記事はなかった。だまされた業者はあまりに取り乱して、警察に訴えることも忘れていたのだ。

そこで、ふたりは2回目の商売を企てる。パリに戻って、まったく同じ手口でまたしても10万ドルの賄賂をせしめたのだ。なんとも大胆な犯行。犯行後、ふたりはまたしても高飛びした。だが、今度は被害者が警察に訴え出たために、もう二度とエッフェル塔売却の商談はできなくなってしまった。

しかし、その後もルースティッヒはアメリカで詐欺を重ねた。結局、F B I に捕まり、刑務所送りになって、そこで、1947年に亡くなったのだ。

### あの手この手で酒を楽しんだ禁酒法時代のアメリカ

酒好きにはガマンできなかったにちがいない時代が、かつてのアメリカの禁酒法時代。1920年1月からアメリカは本格的な禁酒の時代に突入した。

禁酒法ができた背景には、クリスチヤンを中心にした国民のモラルの向上を目指す運動があった。酒を飲まなければ、より働くようになり生活も豊かになる。家庭も円満になるというわけだ。

こうした雰囲気の後押ししたのが第一次世界大戦への参戦。禁酒による食糧の節約、作業能率の向上、戦意高揚などが強く叫ばれるようになった。そして、とうとう禁酒法が制定されたのである。

だが、酒好きがそう簡単に酒をやめられるはずがない。実際にはもぐりの酒場があちこちに誕生したし、人びとはそこで酒を飲むようになった。その第1号になったのは、ニューヨーク、マンハッタングリニッジ・ヴィレッジで安ホテルを経営していたバーニィ・ギャラントという男。彼は人口のドアに小さな四角い窓を作って、そこから客を確認して常連だけを中に入れるシステムを考案した。また、表向きは洋服屋や床屋、薬局、葬儀屋といったふつうの店で、その奥や地下でもぐり酒場を営業するケースも多かった。

こうしたもぐり酒場はあつという間に全米に広がり、全米で20万軒もあったという。ニューヨークでは禁酒法によって1軒の酒場が閉まると、2軒のもぐり酒場が開店した計算になるほどだった。なかには、体を壊しそうな質の悪い酒を出したり、バーテンが賭博や売春の客引きをする酒場もあった。また、値段もピンキリで、一晩で何百ドルも取る店もあったという。

もぐりの酒場だけでは満足できなかったのか、人びとは自分たちでこっそりパーティを開いて酒を楽しむこともあった。密造所から手に入れたウィスキーのビン足を足に巻きつけたり、腰の周りに下げて上着で隠したり、空洞のステッキに流し込んだりといった涙ぐましい努力を重ねて酒を持ち寄ったのだ。

もちろん警察だって黙ってはいない。禁酒取締官のイジーとモーのふたりのように、数年間で押収した密造酒が500万本、逮捕者4000人というすさまじい記録を残した警官もいた。だが、その一方で買収されて、密造や密売を見逃す警官も少なくなかった。

禁酒法は結局、密造酒を横行させ暗黒街の犯罪を助長させただけだった。そして、とうとう1933年に廃止されたのだ。

### 怪僧ラスプーチンがロシアで力を持った理由

時代の混乱期には、ユニークな人物が登場するものだ。帝政ロシア末期に現われて「怪僧」と呼ばれたラスプーチンもユニークでミステリアスな人物だった。

彼の宗教はフリスト（鞭身派）という新宗派に近い新興宗教で、催眠術も取り入れていたらしい。また、生まれつき千里眼の能力を持ち、病人のベッドの横にひざまずいて祈り、両手を病人の上に置くだけで病気を治すことができ

たという。そして、こうした不思議な力を使って、数々の奇跡を起こしたといわれているのだ。

そんな彼がロシアの宮廷で力を持つようになったきっかけは、アレクサンドラ王妃に引き立てられたのがきっかけ。彼女は、わが子であるアレクセイ皇太子が血友病的な体質を持っていたため大いに悩んでいた。あるとき、皇太子がひどい内出血を起こして命の危機に瀕した際に、ラスプーチンの噂を聞きつけて出頭を要請。すると、彼はみごとに皇太子の命を救ったのだ。

これをきっかけに、王妃は何かとラスプーチンを頼りにした。皇帝にも紹介され、宮廷に盛んに出入りするようになった。同時に女性信者との不適切な関係が話題になるなど、批判も受けるようになったが、皇帝がこの批判に耳を貸さなかったために、ラスプーチンはますます王妃に支持される。そして、最高総司令官ニコライ大公の更迭を働きかけるなど政治にも口を出すようになったのだ。

それからの彼はまさに飛ぶ鳥を落とす勢い。皇帝の助言者として圧倒的な力を持つようになった。だが、同時にそんな彼に対する反発も高まり、あまりに王妃が彼を支持するため、ふたりが愛人関係にあるという噂も流れた。

そんな人びとの反発の声をバックに立ち上がったのがユスボフ公爵だ。1916年すえ、彼はラスプーチンを自宅の地下室に誘い込み、毒入りケーキを勧めたのちに拳銃で彼の背中を撃った。だが、ラスプーチンはまだ死なない。鉄の棒でめった打ちにされ、ネヴァ川に放り込まれたときにも、まだ息をしていたという。

彼の死後、奇妙な手紙が発見された。自分が1917年1月1日以前に死ぬこと。そして、自分を殺したのが農民階級なら皇帝の統治が今後も続くが、もしも貴族階級なら皇帝も、子どもや縁者も2年以内に死ぬことが書かれていた。やがてこの予言が的中。皇帝とその家族は1918年7月にすべて殺されたのだ。

なんともミステリアスなラスプーチン。まさに謎の人物である。

著者 裏世界史研究会

# 世界史88の裏側をのぞく

平成26年 7 月14日

裏世界史研究会

大高まゆ子

株式会社クリエイターズギルド  
東京都千代田区神田駿河四-三  
新お茶の水ビルディング十四階

キニナルブックス一覧サイト  
<http://www.cguild.com/kininalubooks/>

© Urasekaishikenkyukai2014